



お茶の水女子大学

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント

「ワークショップ：被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・
緊急支援～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」

『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」

実施報告書

2020年1月

グローバル協力センター

はじめに

お茶の水女子大学グローバル協力センターでは、紛争終結国や開発途上国における平和構築、開発、及び、人間の安全保障に関する教育・開発・実践と人材育成を目的とする「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業を平成22年度から実施しております。本報告書はこの事業の一環として令和1年度に実施した大学間連携イベント「ワークショップ：被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支援～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」(令和1年6月29日)、及び、「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」(令和1年7月6日)の実施記録と参加者の報告書を取りまとめたものであり、講義、グループワーク、議論等を通じた、学生の様々な気づきや、考察を深めていく様子が記録されています。本イベントが、学生の今後の学習・研究や、国際協力の取り組みの参考となることを期待致します。

未筆ながら、本イベントの実施にご協力いただいた講師の皆様に心より感謝申し上げます。

2020年1月

お茶の水女子大学グローバル協力センター

センター長 棚橋 訓

「ワークショップ：被災者の尊厳の視点から
考える紛争・災害時の人道・緊急支援
～スフィア・スタンダード、教育ミニマム
スタンダードに学ぶ～」実施報告書

目 次

	ページ
1. 活動の概要	1
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) プログラム概要	
(6) 参加者	
2. 講師報告書	5
3. 参加者報告書	9
4. 資料	51

1. 活動の概要

1. 活動の概要

(1) 活動の目的：

本イベントは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業の一環として実施する大学間連携イベントである。

近年、日本を含め、世界的に自然災害が多発し、長期にわたり避難所等で不自由な生活を送る人々が増加している。また、多発する紛争により、生活の場を追われ、難民キャンプ等での生活を余儀なくされる人々も増加している。

自然災害や紛争から避難した人々への人道・緊急支援は、国家や国際機関、NGO 等に加え企業、個人等によって、様々な形で行われているが、支援をする側は、往々にして、人々のニーズに合致しない援助をしたり、一方的な「善意の押しつけ」と考えられるような事態を生じさせてきた。この背景には、支援者と被支者の間に不均衡な力関係が存在することや、それに付随して被災者を中心に据えた支援が軽視されてきたこと、および、支援者側の連携不足等が存在する。こうした問題は国内の災害時の避難所においても見られる。

最近になり、このような事態を改め、支援計画や内容に対し、被災者・受益者側が要望・苦情を提起する機会を設けることなどを通じて、アカウンタビリティ（説明責任）を確保しようとの考えが広まってきた。こうした最近の動向の根幹にあるのが、今回のワークショップで取り上げる人道・緊急支援のための国際基準である。こうした考え方は、国内の災害対応においても重視され、報道においても取り上げられていることもあり、人道・緊急支援関係者のみならず、広く一般の関心を集めている。

本ワークショップでは、人道・緊急支援に関する国際基準に初めて接する学生を対象に、同基準の背景にある原則や考え方、現場のニーズに即した支援について学び、国内の災害援助のあり方、また、海外における人道・緊急支援のあり方について、広く考える機会とすることを目的とする。

(2) 実施日時：2019年 6月 29日（土曜日）10：00～17：00

(3) 実施場所：お茶の水女子大学 国際交流留学生プラザ 多目的ホール

(4) 講師：「支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク（JQAN）」

五十嵐豪氏（AAR Japan 所属）、福田紀子氏（清瀬市男女共同参画センター所属）

(5) プログラム概要：

支援の質とアカウンタビリティ向上ネットワーク（JQAN）／難民を助ける会（AAR Japan）の五十嵐豪氏、清瀬市男女共同参画センターの福田紀子氏をお招きし、人道・緊急支援における支援の質とアカウンタビリティ、支援の質向上のための9つのコミットメントに関する講義、グループワーク・発表・議論などを含む参加型ワークショップが実施された。

トピック	実施形態
架空の支援事例の問題抽出	グループワーク
人道支援の歴史、原則	講義
支援の質向上のための9つのコミットメント	講義・グループワーク
架空の支援事例の改善策の検討（寸劇と議論）	グループワーク

- ・ワークショップの冒頭、架空の支援の事例を取り上げ、具体的な問題（村長の話だけで支援の対象地域を決めてしまう、支援の情報へのアクセスが限られる女性たちが支援物資を受け取れない、そうした結果、被災者から不満がでてくる、等々。）を見ていくことで、人道・緊急支援の課題について、具体的なイメージを持つことができた。
- ・こうした課題は、人道・緊急支援にとどまらず、援助全般にも共通するものであり、援助の課題について考える上でも参考になった。
- ・スフィア・スタンダードが、1994年のルワンダ虐殺後の人道支援の失敗への反省から、開発されてきたこと、人道危機と支援の歴史の紹介があり、大局的な視野を持つことができた。
- ・スフィア・スタンダードの根源にある人道支援の考え方や、支援の質を高めるために必要な9つのコミットメント（ニーズにあった支援、被災した人々が支援内容の決定に参加し、また、正当な要望や苦情を訴えることができる、等）について、理論を学ぶとともに、理論に基づき、冒頭の問題の多い架空の支援事例の改善策を考え、これを寸劇にして発表した。自分たちが支援者、被災者の役割を演じることで、様々な問題に気づくことができた。（被災コミュニティの人間関係の尊重、支援の質を向上させる際の受益者の役割の重要性、等）
- ・2名の講師は、国内外の人道・緊急支援の現場での豊富な経験を有しており、現場での課題（支援が被災者間の対立を生むことがある。支援の現場でのジェンダーに基づく暴力の問題、等）について、率直な意見を聞くことができた。
- ・本ワークショップは、日本で多発する災害を踏まえ、タイムリーな内容であった。

（6）参加者：

お茶の水女子大学 学部生 18 人、奈良女子大学 学部生 5 人が参加。

（内訳）

	お茶大			奈良女子大	
	文教育学部	理学部	生活科学部	文学部	理学部
1 年	2	2	6	2	2
2 年	4	—	2	1	—
3 年	1	—	—	—	—
4 年	1	—	—	—	—
計	8	2	8	3	2

2. 講師報告書

研修報告書

1. 研修対象：お茶の水女子大学グローバル協力センター大学間連携イベント
2. 研修項目：「ワークショップ：被災者の尊厳から考える紛争・災害時の人道・緊急支援
～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」
3. 研修期間：2019年6月29日（土）10：00～17：00
4. 研修講師：五十嵐 豪、福田 紀子
5. 研修開催場所：お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ 多目的ホール

●研修概要（実施方法等）

導入部分では、参加者が自らの普段の生活を振り返り、支援に必要とされるものを話し合った。最初のワークでは、自然災害における国際 NGO の活動事例を読み解き、支援活動としての大まかな流れを学ぶとともに、参加者が中心となり活動における様々な課題を抽出した。続いての座学では、人道支援の歴史と人道4原則など、人道支援を学ぶ上で必要な背景や概論を学んだ。

昼休みを挟んだ午後の部は、午前中に説明された概念の振り返りから始まり、具体的な人道支援の最低基準の内容に触れて行った。ワークでは、最新のスフィア・ハンドブックの核となっている、人道支援の必須基準（CHS）から9つのコミットメントをグループごとに考えた。グループの発表ごとに、それぞれ9つのコミットメントの解説もされた。

最後のグループワークでは、概念として学んだ9つのそれぞれのコミットメントを、どのように具体的に実践に落とし込んでいくかの演習を行った。グループには、CHSのコミットメントの一つが割り当てられ、そのコミットメントに関連して、午前中に読み解いた活動事例の改善策を考え、それを寸劇形式で発表した。発表時は、発表したグループが発言するだけでなく、他の参加者や講師からも積極的に意見や質問できる全員参加型のディスカッションとなった。

●所感

- ・ 導入のアイスブレイクから参加者が積極的に話し合うことにより、人道支援を自分ごとに落とし込んで考えることが出来るようになったと感じた。明らかに課題の多い活動事例を用いたことも、理解を深めるのに有効であったと思う。
- ・ 事前課題については、導入時間の不足を補い、学習者のポテンシャルを高める為に役立った。また、参加者によって多少の読み込み／理解の差があることを想定した上で、グループでの分析によって共有した事で問題意識の相互レベルを合わせ、その後の理解に繋いだと考える。課題共有も視覚化したことで、1日を通してその成果を踏まえ、繋げる事ができた。
- ・ 座学の部分はどうしても、概論的な部分が多く、用語を基礎知識として学習・定着させるためには、さらなる工夫が必要だとも感じた。
- ・ 知識の実践化のための寸劇ワークは、非常に有効であったと思う一方で、グループ発表数をもう少し減らすと、個々のグループへのフィードバック時間をもう少し増やす事ができ、全体の質疑応答の時間も十分とれたのではないかと反省する点であった。発表数の調整につい

ては、コミットメントを複数担当させる等も考えられるが、人道支援の活動や組織運営の経験がまだあまりない学生にとって扱えるかどうかとも検討を進めていきたい。

- ・ 今回は人道支援の背景や定義等を中心に理解を進めたが、スフィア基準の構造等についてはコア基準（CHS）以外の部分については十分に言及出来なかった。時間の制約があるための選択であったが、国際基準としての知識を得る為に何かできる事が無かったか検討していく必要がある。
- ・ 全体としてモチベーションが高い参加者が多く、とても良い雰囲気での研修を進める事ができた。大学側からも丁寧なサポートがあり運営がスムーズに行った点も、改めて謝辞を述べたい。

3. 参加者報告書

岩城 風沙

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

このワークショップに参加する以前は人道支援がどういうものなのか、何が求められるのかなど何もわからない状態であったため、講義を通してたくさんのもので得ることができた。中でも印象に残っているのは人道支援の質と説明責任についてである。人道支援をする際に表現されたニーズに応えることが重要だと思っていたが、それに加えて表現されていなくても必要なニーズがあること、またそれに応えるのも適切な時期でないと意味がないこと、さらには支援の際には支援対象の尊厳を尊重する必要があることを知り、簡単なことではないのだなと思った。加えてワークショップ内では人道支援の必須基準の中にある9つのコミットメントと質の基準についてのグループワークや講義があり、これにも気づかされることやためになることが多くあった。特に、コミットメント3の「被災した地域社会や人びとは、人道支援の結果、負の影響を受けることなく、より良い備えや回復力（レジリエンス）を得て、より安全な状態に置かれる」というものが印象に残っている。講義の中で負の影響の具体例として、食糧配布によってその地域の経済回復を止めてしまうことがあるという内容のお話があり、衝撃を受けたからだ。被災して困っている人々に対して食糧配布をすることが彼らにとってマイナスになり得るとは思いもせず、自分の視野の狭さを実感した。弱さに着目するだけでなく強さを活かす、被災者一人ひとりを見た支援をするというのは人道支援に関わる全ての人が心がけるべきことであると学ぶことができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは事前に提示された人道支援の例を用いて問題点を話し合い、また人道支援の9つのコミットメントと質の基準に合わせた改善策を寸劇によって発表した。私たちのグループはコミットメント5の「被災した地域社会や人びとが安全に苦情や要望を述べることができ、迅速な対応を受けられる」が実践できるような案を考え、一つの改善案で他のコミットメントの達成にも繋がることに気づくことができた。また、改善案を考える中で理想の形が考えられてもそれを実行するのは現実的でないなと感じることが多くあって、限られた予算や時間でどれだけ工夫してできる限りのことをするのか、時には妥協をしながら調整する必要があるのだなと思った。関連して、人道支援は政府主体であり、NGO はそれを補うためのものであるから現地の政府と協力しなければならず、また人道支援の現場には他団体も多くいる場合が多いというお話があり、協力し合いながら効率よく動くことの重要性を感じた。また内容とは関係のないことではあるが、今回のワークショップは積極的に参加する姿勢が求められていると感じることが何度もあり、自分もそれに応えてこの時間を充実したものにしようという意識で取り組めたのが印象に残っているし、実際にとてもためになったと終わった後に感じることもできたので、これからもこの姿勢を続けていこうと思うことができたのは、この講義を通して得られた大きなものだと思う。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

日本において災害が起こった際、ボランティアの人たちが方針を決める会議などに参加することなく勝手に現場に行ってしまう場合があり、混乱を招いているという話について何か改善策はないか考えた。彼らは現場に行く前にきちんと下調べをしていないと思われ、そこには彼らに責任があるだろうが、被災者を助けたいという気持ちは人道支援を行う NGO と変わらないためうまく協力が出来れば現地で活動する NGO にとっても大きくプラスになるだろう。彼らが簡単に現地の NGO の活動と協力するにはどうしたら良いか。まず考えたのは彼らがボランティアに行こうと思ったきっかけは何かということだ。人道支援が行われていることを知ると同時にボランティア活動は自分たちで勝手に行うものではないと分かれば、現状は改善するのではないかと思ったからである。私はそのきっかけはテレビや新聞の報道が多いのではないかと思う。このことから NGO は報道陣とも協力してボランティアに参加したい場合の連絡先などを提示してもらうなどの対策を取ることが有効なのではないかという考えに至った。私自身もボランティアを取りまとめる団体が存在することを知らなかったし、人道支援の基本原則などについての知識も持っていなかったが、いつかボランティア活動に参加したいという気持ちでいた。同じように軽い気持ちでボランティアに参加しようと思う人は多くいるのではないか。より多くの人が人道支援についての正しい知識と関心を持つことで NGO も効率よく人道支援が行えるようになるだろうから、NGO 側も工夫をする必要があると思うし、また、自分たち大学生にもできることはないかこれからも考えていきたいと思う。

岸岡 優佳

奈良女子大学 理学部化学生物環境学科生物科学コース 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義を通して、これまで自分が抱いていた災害時の支援に対する考えが大きく変わった。特に印象に残っているのが、より多くの支援団体が現地に行くことが、必ずしも良いことではないということだ。今までは支援団体の数が多いほど、効率的かつ迅速に支援にあたれると思っていた。しかし実際、布団が大量に支給され、有り余ってしまい困ったことがあったことや、多くの支援団体が活動したにもかかわらず不適切な支援によって難民の 8 万人以上が死亡したという事例を聞いて、衝撃を受けた。なぜこのようなことが起こったのか。『助けてあげ隊』のペンギン村での支援でも、調整会合に参加せず、村長からの要請のみで行動した結果、本当に被害が深刻だった地域に支援に行けなかったという例があった。少数の意見を聞くだけでは、本当に支援が必要な地域が分からず、支援に行けない可能性や、本当に必要としている物資が分からないことがある。このようなことを防ぐためにも、支援者側どうしの連携、協力がとても大切なことだということがよく分かった。また、むやみにボランティアや個人で支援に行くのは良くない場合

もあるということが学べた。

他にも、ペンギン村での支援物資配布会場に現れたのは男性が多かったという部分が気になった。男性と女性の差別が激しい国もある中、きちんと女性や子ども、少数民族の人たちにも支援が行き届いているのか、意見を聞いているのかなども確認する必要があると感じた。

「支援する」というのは、ただ物資を渡せば良いというだけでなく、人道性・公平性・独立性・中立性に基づいて行動しなければいけないなど、「支援する」ことの奥深さ、難しさを学ぶことができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残っていること

グループワークで寸劇を作った時、劇を作るために『助けてあげ隊』のペンギン村での支援の問題点を挙げるのは容易だったが、その問題点の解決方法を考えるのは非常に難しかったことが印象に残っている。

私たちの班は、「人道支援の質と説明責任に関する必須基準（CHS）」の「被災した地域社会や人びとが安全に苦情や要望を述べることができ、迅速な対応を受けられる」というコミットメントに基づき、支援内容が書かれている紙の文字が読めない女性を対象に、どう対応するかを考えた。話し合った結果、支援内容が掲示されている掲示板の近くに職員を配置し、字が読めない人に対して、内容を読み上げるという対応法を採用したが、実際の現場では人手も足りていないと予想されるし、一人ひとりに対応するのは困難だと思われる。

他にも、外にあまり出歩かない人たちに、どのようにして掲示内容を伝えるか、また、水が重すぎて運べない人たちへの対応方法も考えたが、良いアイデアは浮かばなかった。時間も人手も資源も限られている中、どのようにして苦情、要望に適切に対応するかがどれほど難しいか、グループワークを通して身をもって感じることができた。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

日本の支援者から寄付を受けている分、良い報告をすることは大事だと思うが、日本のプレゼンスを高めるためや、ビジネスのために支援に行くのではなく、被災者のことを一番に考える団体が増えてほしい。後日あがった反省点などもきちんと話し合っ、次に活かすことが、支援の室を上げるのに繋がるはずだ。

先日、「持続可能な開発目標（SDGs）」のマークが阪急電車に取り付けられているのを見つけた。人々に広く知ってもらうには良いアイデアだと思う。しかし、何度か目にしていたはずだが、今回の講義を受けるまで、意識してこのマークの意味を考えたことがなかった。講義を受けた後からは、広告や新聞でもよくこのマークが目に入るようになった。人道・緊急支援についても、人々に意識してもらうためには、やはりある程度教育が入り、慣れ親しむことが重要だと考える。



(SDGs マークが入った阪急電車)

<https://twitter.com/unpelteazer/>

佐久間 菜緒

お茶の水女子大学 言語文化学科 2 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

まず、災害が発生した時に必ずしも人道危機になるとは限らないということに考えさせられた。支援をする際に被災地域の対応能力、脆弱性、回復力を考えた支援をする必要があるということを知った。全ての被災地域に同じように食糧や日用品を配ればよいという訳ではなく、被災地の対応能力や回復力に応じた支援をしなければ効果的な支援はできないということに支援の難しさを感じた。例えば、講義で学んだように、食糧を配ることを続けたため、被災地で食べ物を買う人がいなくなり、被災地の経済が回らなくなるといった事例がある。これは支援によって被災地の回復力を弱めていることになるため、被災地は負の影響を受けていることになる。これを防ぐためには、支援が被災地に与えている影響を客観視し、長期的に見たときに被災地にとってプラスになる支援をその都度考える必要がある。

次に、スフィア基準について支援に関する世界的な基準があることは特に緊急時に役に立つと感じた。全ての基準を実際の現場で満たすことは難しい時もあるかもしれないが、全ての支援団体が事前に同じ基準を共有していることは大切だと思う。

最後に、実際の現場で各団体間が情報共有することの重要性を学んだ。ペンギン村の事例で、『助けてあげ隊』の代表者は調整会合に出席しなかったため、大事な情報を手に入れることができなかった。緊急時には情報収集が難しくなるので、他の団体とも協力し合うことは大切だ。海外での支援の場合、日本だけでなく、様々な国から支援団体が派遣されていると思うので、国籍に関係なく情報共有をできる場があるといいと思う。他団体との関わりを持つことは、支援する上でだけではなく、自らの安全を確保する上でも大切だと聞き、支援しに行っている側の身に何か危険なことがあったら、支援を受ける側にとっても迷惑だと思うので、そういった理由でも他団体との連携を重要視すべきだと感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでペンギン村の支援における『助けてあげ隊』の問題点を話し合った時に、自分一人では気づけなかった問題点をたくさん知ることができた。例えば、研修中の高橋さんが緊急支援チームに加わったことは、私は新人が現場で経験を積む良い機会になると考え、あまり問題視していなかったが、地震という緊急事態が起こっている現場や日本と環境が全く異なる場所を初めての現場として選ぶのはふさわしくないという意見もあった。また、「北極紛争シロクマ難民支援」のための助成金を一時的に借用したことも、一時的に借用という形であったため私はあまり問題視していなかったが、資金の流用はよくないという意見もあった。同じ事例に対して様々な見方があることを実感できたグループワークだった。『人道支援の必須基準』の9つのコミットメントのうち1つが割り当てられ、割り当てられたコミットメントに基づいて『助けてあげ隊』の問題点を解決し、それを劇で発表するというグループワークもあった。私のグループはコミットメント5の「被災した地域社会や人びとが安全に苦情や要望を述べることができ、迅速な対応を受けられる」が割り当てられた。安全に苦情や要望を述べるというのは支援者側から積極的に被災者に声をかけ要望を聞くことで支援しているという気持ちではなく支援させて頂いているという気持ちで被災者に接することで解決できると考えた。しかし、迅速な対応というのが難しかった。ペンギン村の事例では、食糧配布の際に、「水が重すぎて運べない」「名簿に名前がなくて食糧を受け取れなかった」などという苦情があがったが、それらの苦情に対して謝罪や反省点として次に活かすことはできても迅速な対応は難しいとグループで劇を考える上で感じた。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

今回のイベントを通して理想的な支援とは支援者側の利害を考えるのではなく、被災者の立場にたって行う支援のことだと学んだ。しかし、口で理想的な支援について語ることはできても実際の支援の現場では実現することができないことの方が多いのではないかと感じた。『助けてあげ隊』の支援の仕方について様々な酷評があがったがそれらを全て解決することは実際の現場では不可能なような気がする。そこで私が重要だと考えたことは優先順位をつけることである。イベントで調整会合の重要性を学び、調整会合には必ず出た方が良く感じたので『助けてあげ隊』の場合、まずは調整会合に参加することから改善していくべきだと思う。また、被災者を助けたいという善意はあるが、うさぎの着ぐるみを大量に送り付けるといった意図せず迷惑な支援をしてしまうことは現在様々な人が支援をしたいと考えているため問題になっていると思う。支援の輪が広がることはいいことだと思うので、支援の専門家ではない一般の人にも今回私が参加したイベントのような機会を提供して支援について少しでも学んでおいてもらうことが必要だと思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回のイベントで私には支援についての知識がまだまだ足りていないと感じた。支援についての様々な実際の事例があると思うので、それらを見て、どのような支援が成功していてどのような支援が失敗しているのかを学びたいと思う。スフィア基準という国際的な支援の基準があるこ

とを知れたのはよかったので、スフィア基準の中身や実際にどのように使われているのかを調べてみたい。また、過去のスフィア基準と最新のものを比べてみることで支援の在り方がどのように変わってきたのかを知れると思う。

鎌田 日菜子

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義を通して、今まで知らなかった多くのことを学ぶことができた。さらに、自分の人道支援に対する考え方が大きく変わった。中でも、特に印象に残っているのが、食糧支援が支援地域の回復を妨げ得るということだ。私は、今まで、食糧があるに越したことはないし、生命を維持する上で欠かせないものだから、食糧支援は良い影響を与えることがあっても、悪い影響を与えることはないだろうと思っていた。しかし、それは支援する側からの一方的な視点からしか見ることができていないということを知った。支援地域にしっかりと目を向けると、食糧の支給により、マーケットの品物が売れなくなり、店を開いている人が収入を得られないだけでなく、地域全体の経済回復が妨げられるということも起こり得るのだ。私は、支援をする上で、今まで自分が必要だと考えていた以上に、詳しく支援地域について知ることが求められるのだということを知った。研究と同じで、男性のみや年配の方のみなどといったように、偏った調査ではなく、多様な人を調査して情報を得る必要があるということも知った。しかし、その一方で、支援地域について知るためには、時間や労力が必要不可欠であり、効率的な支援との両立が難しいと思った。このように、一口に支援をするといっても、支援内容だけを考えれば良いのではなく、支援地域の現状や支援団体の支援形態なども、同時に考えていかなければならないのだと考えた。さらに、コミットメントに応えるための基準についても考慮しなければならない。人道支援においても、「ほうれんそう（報告・連絡・相談）」が大切なのだと感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

今回初めてワークショップ形式の講義に参加したが、座学とはまた異なった学びができたと感じる。国際 NGO『助けてあげ隊』の活動記録を読み、欠点を話し合う活動では、自分が気付かなかったところを見つけてもらって納得する他にも、欠点なのか否か微妙な点を話し合うときに各々の知識や考えを引き出して考えることができ、より主体的に支援について考えることができた。また「9つのコミットメントと質の基準」に基づいて、『助けてあげ隊』の活動の欠点を改善させた寸劇を作って発表をするという活動はとても面白かった。自分が劇を考えるときは、基準に則って、いかに行動するのかを考えるという点で、簡易ではあるが、模擬的に支援に参加しているような経験ができた。他のグループの発表を見ている時は、それぞれのグループの個性あ

ふれる劇が面白かったのは勿論、基準と照らし合わせてみることで実際の支援の様子がイメージしやすくなり、文字で見ているよりも具体的に評価することができた。また、その中で、コミットメントが1つのみでなくいくつも繋がってより良い支援になるのだという新しい発見を得ることができた。これも、グループ形式だったからこそ学びだったのではないかと考える。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

今回の講義を通して、自分は支援について分かったつもりでいて、実際は分かっていなかったのだと感じた。講義を受ける前、私は、支援をする理由・動機について、自分と異なって、生活等で苦しんでいる人々がかわいそうだから助けてあげなければ、という同情・使命感に基づいて支援に参加するのだと考えていた。しかし、講義の中で、被災者が支援を受ける権利を持っているから支援をするのだというお話を聞き、自分の誤解に気が付いた。また、人道支援とは、被災者の生命や安全を確保するだけでなく、尊厳も確保することが求められているということも初めて知った。これらと、南極共和国ペンギン村における食糧配布の失敗例から、被災者が支援を受ける権利を持っていることを理解していなければ、真の意味で被災者を支援することはできないのだと考えた。また、人道支援をする上で、やみくもに自分たちの主観で行動するのではなく、ある程度の指針が必要であり、その則るべき指針を明確に提示する必要性があると感じた。人は強く他人のために動こうと意識しない限り、自分の得になるような行動をしてしまうことが多々あるため、それを防ぎ、効果のある支援をするためにも、支援の筋立てやある程度の統制が必要なのではないかと考えた。また、私は、東日本大震災発生後に、被害の比較的少なかった仙台市内の小学校でジュースが支給されたことに、小学生ながら、疑問を抱いた。どうして被害が少ない私たちがもらうのか、もっと必要としている人がいるのではないだろうか、と思った。今回のワークショップの中で、本当に必要とされる地域への支援が行き届かないといった事例に重なった。「9つのコミットメントと質の基準」をはじめとする、今回の講義内容のような支援の在り方に関する正しい知識を広めることで、社会全体の支援に対する理解が深まり、より効果的な支援を行うことができるようになるのではないかと考える。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回の講義を通して、支援とはどういうものかということを完璧に理解できたわけではない。しかし、支援とは、今まで自分が考えていたものとは異なり、さらに在り方を考え、理解した上で行動に移さなければならないということが分かった。私は、児童虐待に関心があり、将来的に虐待に関わる親子の支援をしたいと考えている。今回の講義は、紛争・災害時の人道・緊急支援についてのお話だったが、虐待の支援にも繋がる部分を見出すことができた。まず、多くの虐待に関わる親子や身近な人から話を聞くことで、虐待の発生や現状について数値以外の情報も得て、虐待に関わる親子のコミットメントを知ること。次に、ただ安全や生命の維持を目的とするのではなく、尊厳を守ることも前提とすること。さらに、情報の共有を怠らないこと。他にも沢山ある。まずは、大学で専攻の心理学を学びながら、虐待についても知識を増やし、実際に社会で活

動する際には、今回学んだことを活かして支援していきたい。

今井 美智子

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

私がこの講義を通して学んだこととして一番大きいことは、ただ助けたいと思う気持ちだけではいけないということだ。私たちは震災や大きな事故が起きた時、「かわいそうだ」や「気の毒だ」と思って支援しようと思うことが多い。しかし、ただその気持ちを持っていてもありがた迷惑をしてしまうということもありうるのだ。多大な資金でボランティア活動をする芸能人でさえも同様であるということに驚いた。

講義で聞きたいいくつかある中の以下のことが支援する際に大切だと考える。まず、支援される側が何を望んでいるのかをしっかりと把握することだ。極端なことを考えると、例えば大量の毛布を送った時それが余るとむしろ場所を取ってしまう邪魔なものとなる。もしかすると、支援される側が望んでいるものは生死を分けてしまうものかもしれない。だからこそ、被災地は連絡ツールが不足している場所ではありながらも手段をみつけて被災者のニーズを聞くことが大切だと思う。

また、ボランティアなどで現地に行くときには支援される側の心理状態を考慮して行うということも大切だと考えた。もちろん、被災者にとってボランティアとして物資を届けに来てくれたり、街の復興の手助けをしてくれたりすることは喜ばしいことである。しかし、支援する側がその時に心に傷を負っている被災者の気持ちを考えずに写真を撮ったり楽しそうな雰囲気を醸し出していると余計なじめな気持ちになったり、腹立しいと感じるだろう。支援する側もボランティアなどの活動をしている姿を写真に残したいと思ったり、記者であれば被災地の現状を伝えねばならないと思うが、あくまでその人たちが被災地を訪ねているのは人を助けるということが目的だということを常に忘れずにいなければならないと思う。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

私がグループワークで感じたことはいくつかある。まず、今の私たちの生活は恵まれているということだ。最初のグループワークで生きていく上で必要なものをあげた。最初、私たちは食料と水があれば生きていけると考えていたが、他のグループから衣類や連絡手段などが出ていく中で最初は 2つしか必要ないと考えていたのが、どんどん必要だと思うものが増えていった。これは、本当に生きる上で必要なものは少ないのにそれらは簡単に手に入る恵まれている私たちは他のものへの欲も大きくなっていてそれらもないといけなさと考えているからではないかと思った。恐らく、最貧国へ同じ質問をしにいくと食料と水さえあればいいと答える人が多いだろう。

だから、私たちが粗末にしがちな水をはじめ食料なども大切にしていかなければならないと思う。

また、午後の部で9つのコミットメントについてのグループワークをしたが、その時に本当に良い人道支援はその9つ全てを含んだものだということが分かった。しかし同時に、その9つを全て満たすことは非常に難しいということも分かった。どんなに被災者にとって有益な支援ができたとしてもその方法が非倫理的であってはいけないし、効率が悪くてもいけない。それぞれの団体がそれぞれなりにこの9つを満たそうと努力してもほとんどが満たしきることができない。だから、今後あらゆる工夫をしてできる限りそれら全てを含んだ人道支援やボランティアを行っていけるとよいだろう。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

今回のワークショップを通して人道・緊急支援に最も大切なことは落ち着くことでないかと考えた。被災者は勿論、誰もが緊急事態が起きた時慌ててしまう。そうなってしまっただけで確かな支援を行うことができなくなってしまう。支援を受ける側は実際にあらゆることに不自由になったり、ショックを受けたりして、思考停止してしまうことが多い。だからこそ、支援する側が落ち着いて正しい判断をして支援を受ける側にも大丈夫だということをしっかり伝えていかなければならないと思う。そして、落ち着いて自分たちの行動は正しいのか、本当に必要とされているのかをしっかりと検討するべきであると思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回のワークショップで支援する側と支援される側の間における問題は、どのような手段で連絡を取るかということだと考えた。だから、今後の技術の発展を含めてどのように連絡を取ったりニーズを聞き出したりするかが重要となってくるだろう。

土田 珠緒

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科社会学コース 2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

人道支援とは何か全く知らず、事前にインターネットで調べてみても当たり前のことが書いてあるような気がしていた。しかし、講義を通して支援の前提として持つべき知識を得ることができた。

1つ目は、人道支援の質の中の「表現されていなくても必要なニーズ、期待」、「(支援する)適切な時期」である。これらは、どちらも事前に学んで、意識していなければ気づけない点だと思うので、今回知ることができて良かった。

2つ目は、支援者は権力(力)を持っているということである。これは説明責任が「権力を行

使用するプロセス」であることの前提で、権力とは単純に支援者が被災した人々のような困難を抱えていないということではなく、支援者が被災した地域社会や人々に与える影響力を指している。支援者は権力（力）を持っているし、そうでなければ現場に来る意味はないということが、とても印象に残った。今までは、現場に行くことに意味があると思っているところがあったが、決してそうではなく、自分がどのような分野・場面・方法で役に立てるのかを明確にした上で支援に当たらなければ、思いだけがあっても何もできないと知ることができた。

3つ目は、被災地域の状況も支援の方法も様々であるということである。9つのコミットメントと質の基準の3番目の「被災した地域社会や人びとは、人道支援の結果、負の影響をうけることなく、よりよい備えや回復力（レジリエンス）を得て、より安全な状態に置かれる」に関連して、支援者にはそのつもりがなくても悪影響を与えてしまうことがあり、その中には「支援慣れ」があるということが新しい発見だった。「支援慣れ」の前提には、被災地域が対応能力と脆弱性、回復力を同時に持っているという視点がある。被災した地域社会と人々は単に弱い存在ではなく、自らの力で生活を取り戻す潜在能力を持った存在でもあり、支援の方法もまた、手を差し伸べるだけではなく被災した地域社会や人々の自立を促すものでもあるということを学んだ。これまでは支援慣れさせてしまうことは、支援自体が過剰なものだと思っていたが、それは支援の質の問題であり、被災した地域社会の見えないニーズをどれだけ把握できるかの問題であるという考え方を身につけることができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

実際の支援において、人道支援の基本である9つのコミットメントと質の基準を満たすことの難しさを実感した。「ペンギン村」の例について問題点を話し合う段階では、明らかにおかしいと思っていても、寸劇をしてみると自分たちも足りない部分が多く、指摘されるまで気づかない場合もあった。特にグループごとに担当していたコミットメントと質の基準の項目に集中してしまうと別の項目を満たせていないことがあり、9つのコミットメントと質を満たすことの難しさを感じた。また、寸劇をしながら現場を想像してみると判断に迷う場合があり、実際の支援の現場ならなおさら困難が多いただろうと感じた。しかしだからこそ、自分が迷ったときの根拠にできる基準があることを頼もしく感じたし、共通した基準により、支援者同士の主張の食い違いも減らすことができるのではないかと考え、スフィア基準の存在意義を実感することができた。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

先生のお話は、支援の現場での具体的なエピソードも、支援において前提となる抽象的な概念もどちらも含まれていた。他の分野では現場と規則や制度の分裂がしばしばみられる。しかし、紛争・災害時の人道・緊急支援においてはそういったことはなく、スフィア・ハンドブックの作成にあたり現場での経験や意見がもとになっており、だからこそ現場でもスフィア基準を無視せずに支援に当たれるのだらうと考えた。これは、NGOの活動が誰かに命令されてではなく、自らの意思で始まったものであるという背景による部分が大きいと思うが、団体が多くなるにつれ

て NGO も一枚岩ではなくなってしまう可能性が高く、統一された基準を多くの人が知り、修正を加えるなど能動的な態度が必要だと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

緊急時の人道支援だけでなく、自分が誰かを助けたいと思うときに、その思いだけで動いてはいけなと学んだ。動くからには力を持たなくてはならないし、学生である今こそが力となる知識や経験を積む時期だと考える。普段の講義をより深めるとともに、もっと外に出て実践的な経験を積まなければならないと改めて感じる良い機会になった。

また、ワークショップの中で、「権利だから支援する」という言葉があったが、自分の中では、誰かがやらなきゃいけないことから目を背けてはいけないという思い（＝義務感）、から様々な支援について考えてきた部分があったことに気づいた。国際的な話題など遠い地域の災害の話題になると、他人事のように感じてしまう部分があったのもそのせいかもしれないが、自分の考え方を根本から変えなければならないと感じた。これから自分の中で納得できる答えを探したい。

柴田 万絢

奈良女子大学 理学部化学生物環境学科生物科学コース 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

ボランティア活動に参加する時には適切な機関に申し出なくては、そのボランティアに訪れた場所の秩序が乱れ、混乱してしまうだけだということに驚いた。講義を受けるまでボランティア活動には参加して支援をすることに意味があるという考えを持っていたので驚きであった。今後ボランティア活動に参加させて頂く際にはきちんと適切な機関にボランティアに行くことを申し出ることを忘れないようにしようと思う。また、良かれと思って行った支援が地域経済の発展を防げることがあるということも驚きであった。支援の 1 つとして食料を供給することでその地域で食料を販売している人々の商品を買ってくれる人がいなくなるため、その地域の経済発展を妨げてしまうということであった。食料を支援することは、良いことであるといった考えしか持っていなかったもので、初めて食料を支援することの悪い一面を知ることができた。良いことであると決めつけて支援するのではなく、その支援が、地域にどのような影響を及ぼすのかをしっかりと考えてから支援に行くことが大切であると実感させられた。寒さが厳しいからといって、防寒対策としてピンクのうさぎの着ぐるみを提供することが良い支援といえるのか、という問いがあった。ここには、何もないよりは何か着るものがある方が良いでしょうという支援者の押し付けを感じ取れる。また、粉ミルクなどその場に水がなければ飲むことができない物資を供給することは避けるべきだということを知った。粉ミルクの場合、文字を読むことができず、説明書を読めない人に提供することも避けるべきだということだった。説明書を読まずにミルクを作ると規

定されている濃さよりも薄くミルクを作ってしまうことが多く、赤ちゃんの健康に問題が生じてしまうことがあるということだった。文字が読めない人など、様々な人たちのことを考え、支援をすればなんでも良いということではなく、被災者が尊厳ある当たり前の生活をどのようにすれば取り戻すことができるのか、どんな状況におかれても被災者の尊厳を考え、何が正しい支援なのかを考え、押し付けることなく適切に、人道的なこと以外に左右されることなく支援をするこの大切さを知ることができた。支援は反省を繰り返しどんどん更新していかななくてはならないということを学んだ。驚きであったのが金銭の支援を、電子マネーを使って行うということである。これを学ぶまで電子マネーは最新の技術であり、金銭の支援は現金を使って行われるものだという考えしかもっていなかった。しかし、金銭の支援をする時には現金よりも電子マネーを使う方がいいということであった。電子マネーはお酒を買うことを禁止することができたり、持ち主以外はその電子マネーを使えなかったりと様々な制限をかけられることに利点があるということだ。例えば金銭の支援を、現金を使って行い、テロリストにその支援した現金が奪われてしまった場合に、現金には何の制限もかけることができないため兵器などを購入するのに使われてしまうことになってしまうかもしれないが、電子マネーを使って金銭の支援をした場合は、電子マネーには制限をかけることができるためテロリストにその電子マネーを奪われてしまっても、テロリストはそれを使うことはできないため、兵器の購入など、支援した側が望まない使い方で支援した金銭が使用されることはないということだ。このような最新の技術である電子マネーまでもが支援の場で活用されており、それらの最新の技術を使うことで支援がより良いものになっているということが印象深かった。支援をどんどん更新していくこの大切さを知ることができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

南極共和国ペンギン村における食糧配布を題材とし、どうしたらペンギン村の支援がより良いものになるのかをコミットメントを基準に考え、その考案した改善されたペンギン村の支援活動の様子を表した劇を2人程度の班に分かれて披露する一幕があった。私たちの班は被災した地域社会の人々が必要な時に人道支援が受けられるというコミットメント2をどう組み込んだら良いのかを考えながら劇を作っていた。コミットメント2を満たすには、「ペンギン村に到着した佐藤さんが村長に北地区と東地区を支援してほしいと言われ、調整会合に参加することなくそのまま北地区と東地区に支援に行った」という部分が良い支援のための行動には相応しいものではなかったと考え、「佐藤さんが北地区と東地区に支援をしてほしいと言われた後、村長に調整会合に参加して、話し合ってから決めます」といった発言をし、調整会合に参加して様々なボランティア団体と意見交換することで南地区の被害が一番大きかったという事実を知った後、南地区に支援に行く」という提案をした。すると、一番被害が大きかった南地区だけ支援に行くのは、佐藤さんが村長にお願いされ予定していた北地区と東地区の支援を蔑ろにすることになる。そうならないために調整会合でどの地域に支援に行くのかを全てのボランティア団体で話し合い、協力して災害の大きさに関わらず、全ての地域にそれぞれの地域で求められていることに応えるべく支援を行うべきだという意見をもらった。その意見をもらうまで一番被害が大きかった南地区に

に行くべきだという考えしかもっていなかったが、意見をもらうことで自分がより良い支援、一人ひとりのニーズに応える支援ができていなかったことに気づくことができた。そうして、私たちの作り上げた劇は、「佐藤さんが村長に北地区と東地区を支援してほしいと言われた後、調整会合に参加して意見交換をし、話し合った末に、佐藤さんが南地区を中心に、他のボランティア団体で他のすべての地域を中心に手分けして全地域に支援を行う」という構成にまとまった。自分一人では、全ての地域に支援が行き届くようにするという大切なことに気づくことができなかったであろう。劇を披露し終わり講評の際、「村長の意見が蔑ろにされているのではないか」という意見を貰った。その意見を受けて、「佐藤さんは村長に北地区と東地区を支援してほしいと言われたのだから、佐藤さんが北地区と東地区を中心的に、他のボランティア団体がその他の地域を手分けして支援に行くべきであったな」と考えた。意見交換によって自分一人では気づくことができなかったことに沢山気づくことができた。調整会合での意見交換もそうであるが、意見交換をし、話し合うことは自分では考えることができなかった考え方を沢山知ることができ、自分の考え方を高めることができるため、とても大切なことであると改めて実感させられた。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

人道・緊急支援を何のためにするのかという問いに対する答えが胸に深く刻み込まれた。被害にあった地域の人々が可哀想だからとか自分の支援してあげたいという気持ちとか寄付してくれた人々の想いを届けたいからとかではなく、そこに支援を必要としてくれている人たちがいるから支援に行くのだというものであった。今まで何のために支援に行くのかをしっかりと考えたことがなかったため、何のために支援に行くのかという問いは、とても考えさせられるものであった。そして、支援をする時には被災者に対してしっかりと説明責任を果たす必要があるということであった。私はしっかりと説明をすることは本当に大切なことであると考えている。説明なく支援をされても何をしてくれているのか全く理解することができない上に、むしろ何をされているのか分からないままでは不安が募るばかりである。しっかりと説明責任が果たされる必要があるということを切に感じた。支援に行く場所の住民が何を必要としているのかを実際に住民に聞き、その意見をしっかりと反映した支援を行う、住民が中心となった住民参加型の支援が大切であると考えた。それぞれの住民が必要としている支援が違うことは当たり前であり、表現しようとしてもどのように表現すればよいのか分からない人たちの意見もどのように得たら良いのかきちんと考えてそれぞれの住民のニーズに合わせた支援をすることが大切であると考えている。その際、急に現地に支援に訪れた人がその現場のことをすぐには理解できるはずがないので現地のNGOなどと結びつくことで効果的、効率的に支援ができるようになると考える。必要としているものが何であるのか被災者に聞きに行く時であるが支援者の中から誰が聞きに行くのか調整会合などで話し合い、被災者に何度も同じことを聞きに来られることは被災者にとってそれこそ負担であり避けるべきことであると考えた。支援をする時には被災者の置かれている現状を改善するために寒かったら防寒、暑かったら冷房といった支援はもちろんのことであるが、被災者の傷ついた心などを和らげてあげることを目指す支援を行うこともとても大切であると考えた。

今後の学習や研究に向けた抱負

紛争・災害時の人道・緊急支援についての今回の講義での学びは自分の知らないことばかりであった。支援に行く際に支援者が心掛けなくてはならない基本原理やどうして支援に行くのかといった考え方をあらかじめ知っておくことはとても大切だと思った。今回支援に行く際の注意点をいくつか知ることができたが、まだまだ知らないことが沢山あるため、もっと多くのことを学び、吸収し、自らの能力を高めていくことができるように今後の学習に取り組んでいこうと考える。

加藤 里奈

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

私はお茶の水女子大学に入学して初めて授業以外の時間に開催されるイベントに参加した。正直に行ってしまうと、この大学間連携イベントに参加したのも NPO 入門の授業で参加しなければならなかったからだ。「7 時間も拘束されるのか」とうんざりと思うこともあったが、実際 NPO・NGO の活動に興味があったことも事実だったので、事前に渡された課題を読むうちに興味がわいてきた。実際、今回の大学間連携イベントの講義の中で一番印象に残っていることは、五十嵐氏による人道支援の必須基準に載っている 9 つのコミットメントの質と基準の講義である。この 9 つのコミットメントを学んで、1 つずつ個別に聞けばそのような支援を被災者が受けることができるのは当たり前だと思うが、9 つ全てを実現させた支援を緊急時に届けることはかなり難しいことだなと感じた。例えば 5 つ目の「被災した社会や人びとが安全に苦情や要望を述べることができ、迅速な対応をうけることができる」という項目に関してだが、NPO・NGO が行う支援というのは地域内の被災者全員に与えられるものではないため、要望を受け入れてもそれを実現することが物理的に不可能であることが度々あるだろうからだ、少しでも被災者の要望や苦情を受け入れるためにもその地域に来ている NPO・NGO 同士で協力し合うことが必要だと感じた。また、NPO・NGO のメンバーによる性的暴力があるという事実を聞いてとても驚いた。自分の中で勝手に NPO・NGO のメンバーはいい人たちばかりだと思い込んでいたからだ。紛争や災害によって被害を受けた人たちが新たな被害に遭うことはあってはならないことだと思うので、そのような被害を少しでも減らすために、女性の支援者も必要だと強く感じた。ほかにも 8 つ目の「被災した社会や人びとは、必要な支援を、有能で管理の行き届いたスタッフやボランティアから受けられる」という項目に関しては、確かに自分が被災者側だったら支援に慣れているベテランメンバーから支援を受けた方が安心だと思うが、若手を育てるためには現場での試練も必要であると思った。誰にも初めて支援活動に参加する時はあるのだからベテランメンバーの活動を見ながらすぐに成長していける力と全体的に支援者の人数ももっといた方がいいのだと思った。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

ペンギン村を舞台とした事前課題を読んだ時、「これは明らかに間違った行為だろう。」と思った活動や、「これは間違っているかもしれないけれど、この人の気持ちもわかる。」と思った活動に気がついた。そしてグループワークをして他の人の意見を聞くことで初めて気づいた良くない活動も多数あった。例えば粉ミルクは衛生面に細心の注意を配らなければいけないため、支援物資に向いていないということや、課題に出てきたNPOは反省会をしていないということである。また支援物資として日本の支援者の支持が得られるであろう米にするか、現地の主食であるトウモロコシにするかという問題も悩ましいなと思った。個人的には支援を受けるのは紛争や災害の被害を被っている人たちなのだから、できるだけその人たちが望むものを届けてあげられればと思う。さらに五十嵐氏の講義で学んだ9つのコミットメントをグループで寸劇にすることでより理解が深まった。講義だけではイメージがつかない項目もあったが、劇にすることで分かりやすくなって、グループワークとはただ話し合っただけで考えを共有するだけではないのだなと思った。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

今回の大学間連携イベントに参加したことで自分が思っていた以上にNPO・NGOによる紛争・災害時の人道・緊急支援は難しいものだなと思った。今までは寄付によって支援が成り立っているため、支援には限界があるということがNPO・NGOの問題点であると思っていたが、それだけではなく他にも現地の方々とのコミュニケーションや現地のNPO・NGOとの協力、支援をすることをどのように知らせるかなど、支援をすることにあたって沢山の難しい問題があると思った。特に支援をすることを現地の人に知らせる方法については本当に答えが出ない問題だなと思った。もちろん、識字率が十分だと思われない被災地では、一軒一軒訪ねていくことが確実な手段だとは思いますが、実際の現場の様子を想像すると言語が通じるかも分からないし、村がどんな構成になっているかも分からないため難しいだろうとも思った。また今回の課題にあったペンギン村のように、選挙地区によって支援の仕方を変えるのは本当にひどく、許せないことであることに加え、人それぞれ必要としている支援は違うと思うので、様々な立場の人、例えば老人や若い人、赤ちゃんを育てている女性などに聞いて、支援が必要な地域や人、優先されるべき地域や人を調べて人道・緊急支援を行うことが必要だと感じた。被害を受けた現地での活動をして初めて目の当たりにする課題や困難もあるのだろうなとも思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

私はもともと海外の支援を行うNPO・NGOに興味があった。それこそカンボジアや南アフリカなどよく紛争地と言われるところで支援活動をしている人たちを見ると、私もいつかボランティアとして参加してみたいと思っていた。しかし、今回のイベントに参加して、自分が思っている以上に沢山の難問が待っていることに気が付いた。それを自分がボランティアとして参加することで解決することができるとは到底思えないが、自分が活動に参加することで人手が増え、今まで手が回っていなかったところまで支援が行き届いてくれたら嬉しいと思った。私は参加してみ

たいという気持ちだけでまだ国内のNPO・NGOにも参加したことがないのでまずは国内から参加して、世界規模の活動に参加したいと思った。今回の課題で上がった問題点に似たような状況になった時、自分にできる提案をし、また他の人の意見を聞いて自分の考え方の幅を広げていきたいと思った。また、私は女性なので瓦礫を撤去するなどの力仕事はできないが、性的暴力への対処やカウンセリングなど女性だからこそできる仕事を率先して行っていきたいと思う。

田井 愛莉南
奈良女子大学 文学部1年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

支援というものが、被災地域内で対応しきれない問題への対応だけでなく、現地の人々自身の「回復力」を引き出し、サポートすることも含む、ということが心に残った。外発的な力だけでなく内発的な力が生まれることで、復興が大きく前進するのだとわかった。そのためには、どの程度支援をするかが重要だと思う。講義で伺った、支援が「地域の経済活動の妨げになる」可能性だけでなく、支援が集中することで、被災者が援助されることに慣れ、「現状を自ら改善しよう」という意欲が生まれにくくなる」可能性もあると耳にしたことがある。人道支援の必須基準（CHS）のコミットメント7にあるように、被災者にとって「更にいい支援」とは、支援組織が継続的に被災者の心理経験や反省から彼らの精神状態を汲み取り、それを支援の仕方に反映させることであると分かった。

また、人道支援の基準として成立した「スフィア・ハンドブック」が“国際的な一つの基準”として共有されるようになったことの重要性を学んだ。ある地域の支援に集まった団体が、バラバラではなく一つの指針に基づいて行動すれば、互いに協力体制が築きやすいのではないかと思う。人手と時間が限られ、迅速な対応が求められる状況において、他団体と連携することでより被災者のニーズにあった支援や、支援の偏り・ダブリ・漏れを防ぐことができる。支援する側の敷居が低くなってきた分、協力するのが難しい時代において、大きな意味を持つツールであると分かった。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

『助けてあげ隊』の「南極共和国ペンギン村における食糧配布」を9つのコミットメントに従って改善しようとした時、被災者の求める物資であっても、衛生や安全面を考慮すると実現できない場合もあることや、支援物資が限られる中、配布できない人々にどのように説明し納得してもらうかという課題が印象に残った。ニーズに見合った環境が整っているかを判断するために、世代や性別ごとの識字率や、清潔な水が使える環境かを踏まえることが大事だと分かった。また、物資が限られた場合に支援する対象をどのように線引きしたのかを明確にし、被災者皆に開示す

ることが必要だと知った。支援後に、支援が受けられなかった人たちにどのように折り合いをつけたのかを聞き取ることで、次への改善点を把握できると分かった。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

ワークショップの冒頭で「生きていくために必要なもの」を挙げるように求められたとき、私は少し戸惑った。頭に浮かんだのは“どこまで妥協できるか”という問いだった。極限の状況を想像すると、食べられるもの・服・風雨をしのげる場所、があれば命を繋いでゆける気がした。しかし実際その3つの条件が与えられたとして、食べ慣れない食材や着心地の悪い服、プライバシーがなく衛生的でない住居が与えられたとしたら、私は安全にそして安心して暮らせるだろうか。そうした暮らしは私にとって苦悩が多く、長くは耐えられないだろうと思う。こういう感情を抱くのは、被災者も同じであるだろう。応用処置として有り合わせの物でしのぐ必要がある場合は起こりうるが、あくまでそのことに支援者が自覚的でなくてはならないと思う。

自身も、ランドセルや履けなくなった運動靴を貧しい国の子どもたちに送ったことがある。あげるものが使用済みでかつ自分が使わなくなった物であることに少し罪悪感を抱きながら、少しでも役に立てるのなら、と思つての行動であった。しかし考えてみれば、貧しくて買えない若しくは物資がないという理由で、その子どもたちがお古を使わなければならない必然性はないし当たり前の扱いでもない。私はその矛盾に気付かなかった。

このように必要なものを考えたり支援したりする際に大切なのは、彼らの“尊厳”に目を向けることなのだと学んだ。また、尊厳が保たれていると感じるか感じないかを、自分の価値観で判断していないか注意しなければならないと思う。講義で、Tシャツがだらしない恰好とみなされる地域もあるとお聞きして驚いた。信仰する宗教や自然環境、文化が違えば、その人たちにとっての尊厳ある暮らしのあり方も変化することを考慮することが大切だと分かった。

松本 ののか

お茶の水女子大学 生活科学部人間生活学科生活文化学講座2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

講義から学んだことは様々だが、最も印象深いのは、被災者は支援を受ける権利を持っている、ということである。講義の中で、「なぜ支援をするのか」という問いについて「可哀想だから」「支援者側が充実感を得るため」といった答え方が例として挙げられていた。今までは、こうした答えに違和感を持ちつつも、どうして支援をするのか、それ以上の意味が分からないでいた。しかし、講義を通して、人は尊厳ある生活への権利、人道支援を受ける権利、保護と安全への権利を持っていることを改めて認識し、「なぜ支援するのか」納得することができた。

人道支援というと、私はその現場に関わったことはないが、良い事だというイメージを持って

いる。しかし、それは人道四原則である人道、公平、中立、独立に基づいた、現場のニーズに合わせたものでなければ、人道支援と呼べるものではなくなってしまうということが分かった。ルワンダ虐殺の時、質の低い不適切な支援によって難民/国内避難民向けキャンプで8万人以上が亡くなったという話はとてもショックだった。これを受けて、人道支援の質を高め責任を果たすためのスフィアプロジェクトが始まり、規範としてのスフィア・ハンドブックがまとめられたことを知り、人道支援においても国際的な基準が重要なものとして存在していることが分かった。人を助けるため、権利を守るための活動だからこと、説明責任を果たすことが必要であり、制度が求められるのだと知ることができた。さらに、そういった規範の存在は、支援する側だけでなく、被支援者にとっても、自分たちの権利や支援者の役割を知り、責任を問うことができるという意味を持つことが分かった。

また、変化を続ける社会の中で、人道支援のあり方は日々進化し続けており、完成することはないと学んだ。だからこそ、より良いあり方を求めて、経験を積み重ね、後に残していくことが大切なのだと分かった。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

ペンギン村の事例を寸劇でやり直すグループワークが印象に残った。このグループワークでは1つの班が「人道支援の必須基準」の9つのコミットメントのうち1つをテーマとして寸劇を行ったが、はっきりと「このグループはこのコミットメント」と指摘するのは難しく、9つのコミットメントはそれぞれ相互に関わり合っているのだということがよく分かった。自分のグループで実際に寸劇を考える場面でも、1つのコミットメントを達成しようと思った時、自然と他のコミットメントも視野に入ってくることを実感できた。

一方で、ペンギン村の事例について読んだ時は、良くない所ばかりで間違い探しのように感じたが、いざどのようにすればいいのかを具体的に問われると難しかった。1つ目のグループワークで、「これは良くない」と指摘するのは知識や経験がなくても行えたが、どうすればより良くなるのか、また、その理想を実現できるかは、今の自分には答えは出せないと感じた。それぞれのグループの寸劇も、どれも分かり易く面白かったが、まだ改善の余地があるのだろうと思った。

私たちのグループでは、コミットメント1の「被災した地域社会や人びとがニーズに合った支援を受けられる」を課題として、ペンギン村への支援物資を考え直すことをテーマにして寸劇を行った。例えば、他国では粉ミルクへの規制が厳しい場合があり、安易に支援物資として送るのは良くないという話は、栄養学の授業でも聞いたことがあった。粉ミルクはどこでも必要とされるものだとはばかり思っていたので、とても驚いたことを覚えている。国境をまたいでの支援の場合はもちろん、国内での支援の場合でも、それぞれの実情があり、支援者と支援される地域・人々の間でのずれが存在する可能性が必ずあるだろう。何が必要とされているのかは安易に想像だけで決めつけることはできない。この、相手のニーズに合わせるというのは当たり前のことのようにだが、しかし、グループワークを通して、どのようにニーズを探ればより良い支援に辿り着ける

のか分からないことに気付いた。この支援がペンギン村の実情に合っていないことは分かってもどのようにその質を高めれば良いのか、またそれが現場において可能なのかを考えると、答えを出すことができなかった。さらに、現場で有力な声だけではなく、マイノリティの人々のことまで考慮するのは大変なことだと思った。同時に、そのようにきめ細やかなニーズに応えることは、政府にはできない、民間からの支援の役割であるとも改めて感じた。

グループワーク後の講義の中で、全てのニーズを自分だけで抱える必要はなく、ニーズの調査、対応ともに、他団体と調整を行い、共有することが大切だと聞き、そのようにすることは、支援者にとっても、被支援者にとっても重要なのだと理解できた。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

人道支援を行うことは、人の役に立つ尊い行いだと思っていた。しかし、被災した人々のことを考えれば、それは権利を守るためのもので、当たり前に行われる必要があることが分かった。一方で、今回の講義は、人道支援の初歩、入り口に過ぎないとの話を受けて、その奥深さ、難しさを感じた。自分は専門家ではないのだから、知る必要はないと言ってしまうのは簡単だが、いつか自分が支援する側に立つ、また、支援を必要とする状況になる可能性は十分にある。そのような場面で適切に知識を得るためにも、スフィア・ハンドブックや CHS の存在は、もっと広く知られるべきだと思った。

人道支援について聞く時、今の私はほとんど無意識のうちに支援する側に立って、そこからの目線で考えようとしている。講義の中で、支援する側は強い存在であり、被支援者の現状を変える力を持っているという話があった。支援者も被支援者も同じ権利を持った人間であり、両者の違いはその権利のため支援を必要としているか、そうではないかというだけだ。自分には支援ができると思った時点で、すでに支援する力をもっているのだろう。その力を適切に使えるようになりたい。

高木 美沙

奈良女子大学 文学部 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

ウサギの着ぐるみを渡している絵がとても印象的だった。私も、東日本大震災の時に物資を送ったことがある。何を送ったかまでは覚えていないが、知らぬうちに自分も不要なものを送っていたのでは、と不安になった。「無いよりはいいだろう」というのは、自分も含め、多くの人が思ってしまうがちだと思う。恐らくそれは、自分が上の立場であることを前提に考えているからだと思う。なぜ支援をするのか、という話にもあったように、災害や紛争の被災者には尊厳ある生活を営む権利があり、従って援助を受ける権利がある。つまり、人を助けている自分に充実感

を得られるから、被災者が可哀想だから、ではなく、尊厳ある生活を営む権利を回復するために支援を行うのだ。そのためには、支援者が被災者と対等な立場に立つことが重要であると思う。また、売れ残ったTシャツをソマリアに送ってあげたいと持ってきた人がいたが、ソマリアの成人男性は襟付きシャツを着るのが一般的なのでTシャツは適さない、という話もあり、他国に支援物資を送る際にはその国の文化も踏まえなければいけないのだと実感した。

また、支援慣れについての話も印象的だった。物資を無料で配るとその周辺の店で商品を買ってくれなくなり、その地域の経済回復の邪魔をしてしまう、という話だった。継続的な支援の必要性についてはニュースなどでよく耳にするが、支援をしすぎるとその地域の元々の能力さえ失わせてしまう、というのは初めて聞いたことだったので驚いた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

寸劇を考えるのが大変だった。私のグループはコミットメント9を基に改善策を考えたのだが、「リソースが支援組織によって効果的・効率的・且つ倫理的に管理される」という抽象的な内容だったので、難しく感じた。しかし、寸劇を通して具体的な事例に当てはめることで、より内容が頭に入ってきたので良かった。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

コミットメント5の、「被災した地域社会や人びとが安全に苦情や要望を述べることができ、迅速な対等を受けられる」の実現が最も難しいという話が印象的だった。ホットラインの貼り紙を女性の個室トイレに貼ることで、電話番号をメモし易くした、ということを知り、長く経験を積んでいないと気付けないことだと思った。また、コミットメント1の「被災した地域社会や人びとがニーズに合った支援を受けられる」ようにするため、一見必要なようなパン焼き機をすぐに送った、という話も印象的だった。どちらの対応も、様々な人がいることを踏まえた上で、被災者に寄り添って考えなければ出来ないことだと思う。いかに被災者の立場になって気持ちを汲み取れるかが、支援の質に関わってくるのだと思った。

また、難民だけに自分が寄付したお金を使ってほしい、という要望に応えると、難民キャンプだけが城壁に囲まれた状態で豊かになってしまう、という話も印象的だった。確かに、そういう風に格差ができると、元々住んでいた人々との間に対立が生じてしまうだろう。ホストコミュニティも支援することで、双方に利益が生じるので良いと思った。寄付金を募る際にも、そのことを伝えていくことが必要だと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は現在1回生であり、学科も決まっていない状態だが、どの分野を専攻するにしても、今回学んだことを活かしていきたいと思う。

土井 千影

お茶の水女子大学 文教育学部芸術・表現行動学科 4 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

人道支援自体については支援という言葉からどうしても助けてあげたい人たちがやるものだと思うところがあったが、必要性があって、侵害されてしまっている権利を回復するために動いているということを知り、認識が改められた。人道支援の基本原則から、とりあえず何かをするだけでは成立せず人々の生命や尊厳の保護、誰の排除もしない、ニーズに合った行為、何にも左右されない判断が達成されている必要があるということも学び、軽い気持ちでは現場をかき回してしまう可能性があり、実際にトラブルなども起こっているということが印象に残った。また、どうしても支援者側と被支援者側では権力差が生まれ、支援者側が強い立場になってしまうことから、見えない・表現されていないニーズが出てきてしまい人道支援の基本原則を満たしにくい状況が出来上がってしまったり、支援者側に都合のいい支援になってしまったりと困難もあり、注意や工夫をした上で支援の内容を設定していかなければいけないことを学んだ。そのために同じ現場にいる他の支援団体や現地の行政を含めた関係のある団体で、協力・調整をすることの重要性やひとつの団体ですべてのやらずとも専門の機関にニーズを知るために必要な調査をお願いするなどの方法の有用性を感じ取ることができた。このように自分たちだけが分かっているという状況であるため、スフィア・ハンドブックのようなすべての人に開かれ一般化された基礎知識となるものについて学ぶことが、突然起こる災害時には必要性が高まるのだろうと感じた。CHSについて知り、指標となる数字があることでその数字を参考にして、それぞれのニーズにあった支援を考えられるのはトラブルを避けられる可能性があることや、ニーズを知っていてもそれに合った支援内容が分からないといった混乱を避けられる可能性があると思い、印象的であった。コミットメントと質の基準について学び、ニーズに合った支援という言葉から支援が不十分にならないように気を付けなければならないという側面だけを考えていたが、過剰な支援も負の影響に繋がってしまうことを知り、印象に残った。また、被支援者が安全に苦情や要望を述べられる環境をつくるのが難しく、更に意見をもらっても団体がルールを持っておらず、処罰の基準がなかったり、その意見の対処法が決まっていなかったりするということも印象的であった。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

単純で答えが決まり切っていそうな問いであっても、考えることや出てくる言葉が明らかに違うところが面白いと感じた。コミットメントから劇をつくり、観客側がコミットメントを当てるというワークでは、9つあるコミットメントのその多くが繋がっているということが感じられ、印象的であった。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

個人がボランティア活動に行くことができることは知っていたが、事前に登録する必要があることや現地で活動する団体やボランティアの方との協力や活動内容の調整が必要であることは知らなかったため、将来自分が支援者として何かしたいと思ったときに行動しやすくなったなと思った。個人でも協力できるのであれば、自身が団体に入って頻繁に支援に行くことが難しい状況であってもタイミングが合ってその時に正しいと考えられている知識を持って活動に参加できるということはもっと知られてもいいことだなと思った。また、ただボランティア活動をして人助けをした気分になることがとても危険な考えであるのだと思った。権利回復のための支援という考えはとても分かり易く、今までは支援する側の人に対して押し付けがましくなってそうで自分本位の理由から動いていそうだなという違和感のようなものを感じていた自分の考えをうまく覆してくれたように感じた。被支援者側のニーズは全て調査しきることや、それを理解することは文化の違いなどの壁もあり、侵害されてはいけない基本的な権利を回復するのに必要な力や時間はとても大きく、人道支援の難しさと重要性を同時に感じた。被害がどれだけ大きく深刻なのかというような表面的なことばかりが目飛び込むことが多いが、被害の大きさよりも支援内容や現地のニーズ、支援の仕組みについてもっと周知されていくといいなと感じた。

大谷 理香

お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

私は今まで開発援助に興味を持って、将来も国際協力に携わりたいと考えてきたのだが、恥ずかしながら、今回学んだ“支援の質とアカウンタビリティ”という概念に触れたことがなかった。しかし、紛争や貧困、自然災害や気象災害など、思いもよらぬ形で“被災者”となり、肉体的・精神的に不自由な生活を余儀なくされている人々の声に耳を傾けるために、人道・緊急・開発支援に関する国際基準は欠かせないものなのだと分かった。人道・緊急・開発支援に携わる方法としては、国連機関や政府、企業、NGO など様々な組織が挙げられるが、その中でもNGOは前者に比べ、機動的で柔軟な対応が取れ、何より現地の実情に応じたきめ細かい支援が可能になるのではないだろうか。このような理由から、支援現場においてもNGOの果たす役割への期待は高まっているという。過去の失敗を繰り返すことなく、経験や反省を反映した国際基準が次世代に渡って受け継がれ、そしてその時代に合わせて絶えず変化させていくことの重要性を感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

スフィア・スタンダードの核となる9つのコミットメントと質の基準をもとに、グループで紛争・災害時にあり得る場面を想像して、実際に演じてみることで、スフィア・スタンダードが、

被災者個々人の生活や地域コミュニティを復興させるためにいかに重要な役割をはたしているかがよく理解できた。仮に国外で自然災害が発生し、日本国内で「毛布を××村に〇〇枚送ろう！」というプロジェクトが発足したとする。以前の私であつたら、何の疑いもなく適当な家の毛布を寄付したであろう。しかし、9つのコミットメントと質の基準を学んだ今、その行為がその村に与え得る影響の大きさを冷静に一步引いて考えることができるようになったと思う。無償で支援先から毛布を得られるとなれば、その村のマーケットでは毛布が売れなくなってしまう。これは無論毛布に限ったことではない。被災地でモノが売れなくなってしまうということは、よかれと思って進めた支援が、不本意にも被災地の経済回復の妨げになっているということである。こうした可能性を、私たちが想像力を持って学べるのは、スフィア・スタンダードという国際基準が机上の空論ではなく、ひとえに先人たちの数えきれないほどの事例や経験に即したものであるからだと身をもって感じた。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

私は開発援助に興味を持っていたため、これまでは主に途上国の紛争地・被災地への人道・緊急支援について考えてきたのだが、果たして災害大国日本の現状はどうだろうか。スフィア・スタンダードが広く認知され、災害現場に導入されているかという点では、日本もまだ先進国とは言い難いだろう。自然災害が発生した時には助かった命を、その後失ってしまう「災害関連死」が日本では深刻だ。東日本大震災では 2018 年 9 月までに災害関連死で 3701 人が亡くなっており、2012 年 3 月までに死亡した 1263 人について、復興庁がその経緯を詳しく調べたところ、638 人が「避難所などにおける生活の肉体・精神的疲労」が原因だったことが判明している。日本は数多くの災害に見舞われながらも、災害関連死への対策は不十分なままではないだろうか。意外にも海外の避難所では簡易ベッドの使用が進み、一人当たりの空間が比較的広く確保され、20 人に一基のトイレが設置されるなど、災害時においても人道的に過ごすためにスフィア・スタンダードが取り入れられているという。一方、日本では雑魚寝で過ごすという避難所生活が一般的である、私も避難所の夜と聞くと段ボールや薄い毛布の上で家族が身を寄せ合って雑魚寝する姿を思い浮かべてしまう。数字には計上されないものの、災害関連死者数の何倍もの人が、悪い環境の避難所で体調を崩しているはずである。自然災害は人智で如何ともなし難いが、せめて避難所で安心安全に過ごせるようにするという点では改善の余地がある。安全な場所であるべき避難所が原因で亡くなるということはあつてはならない。また、これまで支援者側の支援からスフィア・スタンダードについて考えていたが、私自身いつ災害に巻き込まれて被災者となるかは分からない。被災者となった時、簡単なことではないが、ただ受動的に支援を待つのではなく、自分に今できることは何か、どうコミュニティの復興に良い影響を及ぼせるかを考えたい。その際、今回学習したスフィア・スタンダードは大変有用なものであると思う。

一人一人が不慮の事態に備え、予め人道・緊急・開発支援の原理や考え方を学習し、自分個人としてのケイパビリティを高めていくところが、理想的な人道支援の実現の支えになるのではないだろうか。

田島 実のり

お茶の水女子大学 理学部生物学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義で強く印象に残っているのは「支援者は被災者の対応能力と脆弱性をサポートすること」である。これは、被災者が、全員全く力がないというわけではないから、支援者はその力を潰さないように支援していかなければならないということだ。被災者が皆無力なわけではないということは、冷静に考えれば当たり前であるし、そうなれば支援のやり方も被災者のスキルに合ったものにしていくという考えはとても基本的なことだと思う。しかし今までの私は、この考えを思いついたことは一度もなかった。災害が起きれば支援だけでも一定の期間は生活できるようにしたり、復興を早くさせたりするために、様々な機関などを整備するというのが支援だと思っていた。勿論これも支援のやり方の一つにはなる。しかし、どの災害でも全く同じやり方の支援を同じくらいの力量でやるのは違うと今回分かった。被害が他よりも少なく済んだ地域で、被害が深刻な地域と同じだけの支援をするとその地域の人々は自分たちで生活する能力を失ってしまう可能性があるからだ。被災者を支援するときは、被災者がより早く自分たちで元の生活を送れるようにすることを念頭に置いて活動することで、支援者は被災者のスキルに合った活動ができるようになると思う。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークを通して感じたことは、団体同士が協力する大切さである。ワークショップで9つのコミットメントについて各グループがそれぞれ1つずつ劇をするというものがあった。そこで私たちのグループは「被災した地域社会や人びとは、関係団体の間で調整・相互補完された支援を受けられる」というコミットメントについて劇をした。劇を考えるとときに「本来の話では調整会合に参加しなかった『助けてあげ隊』が調整会合に参加することで被害が大きな地域や他の団体の活動予定も共有できる」という工夫を入れた。元の話のこのコミットメントにおけるミスとして、南地区の被害の深刻さに気付かず支援に行けなかったことと、東地区に支援に行ったが既に他の団体による支援が進んでいたことが挙げられる。これらは調整会合に出れば解決されるものであるから、調整会合出席の大切さを感じた。

また、一つの団体だけではすべての分野での支援はできないというお話を聞いて、他の団体と共同で支援をしていることも知った。支援の目的は被災者がより早く今までの生活に戻ることであるから、この案は目的に沿っていて良い案だと思った。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

私はこれからも支援する理由と目的を正しく理解しておこうと思った。被災者を支援する理由は「被災者は尊厳のある生活を送る権利があるから」であり、目的は「自分が持つ力を使って被災地の現場を変えていくこと」である。これらは今回のワークショップで学んだことである。今

までは「被災者の手伝いがしたい」とか「助けたい」と思っていたが、その考えは上から目線であることを知った。実際に現場で支援をする時にこのような上から目線の考え方では、CHSの9つのコミットメントを満たした支援はできないと思う。これらのコミットメントは正しい目的に沿って作られているからだ。そして、これらのコミットメントを満たした支援ができないと、支援としてうまく行かないだろう。

今は支援するために被災地に行ったことは一度もないが、今回のワークショップで自分も何かそういう支援に行きたいと思った。その時に被災者とまっすぐ向き合って、その地域のスキルにあった支援ができるように正しい支援の理由と目的は覚えておきたい。

萩原 佑香

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

講義を受ける前、「なぜ支援を行う必要があるのか」について明確な答えを持っていなかった。困っている人や社会の中で弱い立場にある人の助けになりたいし、助けることができる人が助けを必要とする人たちを助けることは「義務」なのではないか、と漠然と考えていた。しかし、被災した人には支援を受ける「権利」があるから、その権利を守るために支援を行うという話があり、支援とは支援者の義務ではなく、支援される人々の権利であるという新たな視点を学ぶことができた。以前不要になった靴を途上国に送るというプログラムを目にしたことがある。「もう履けなくなったから」とか、「捨てるのがもったいないから」という理由で自分たちが要らなくなったものを途上国に送って、良いことをしたような気になるのはどうなのかと疑問に思ったことを思い出した。支援というのは結局のところ自己満足に終わりがちなのではないかと考えていた部分もあったが、支援を必要とする人々のニーズをしっかりと把握することで、支援者側の自己満足に終わることのないようにしなければならないと思った。

また、被災者であるからこそその弱み（脆弱性）だけでなく、レジリエンス（回復力）にも注目することが重要であるということが印象に残った。講師の方のお話でもあった通り、脆弱性のみに注目してしまうと現地の経済を支援によって阻害し、自己回復の妨げとなるような状況になることもある。また情報が老若男女に等しく行き渡ることが、被災地での生存にとって重要であることを学んだ。その時に思い出したのは昨年、宮城県石巻市に行った際、女川駅の駅舎で、手書きで書かれた「石巻日日新聞（2011年3月14日）の号外を目にしたことであった。そこに書いてあったのは、「石巻市内の大型店から食料・水・毛布などの提供を受けているほか、全国の自治体から支援物資が今後届けられる。石巻市は総合運動公園にそれらをまず集積。その後、各自治体に配布する。また、全国水道協会や他県から給水車や飲料水が石巻に届けられている」ということや、東松島地区、女川町の避難所の状況、救助活動の状況、安否確認についてであった。

大震災直後の混乱状態の中で、いまの支援はどのような状況で、次に何があり、何に気をつけなければならないかを的確に伝えられることによって、何も分からない状態から少しでも脱し、心の支えになったのではないかと考える。この新聞は地元の新聞社の人が書いたものであり、自らも被災者でありながら、新聞社としてできることは何か、やるべきことは何かを考えた結果であった。被災者どうして情報を共有すること、つまり、外部の支援者が一方的に被災者の生活に介入して行くだけでなく、被災地をよく知る被災者自身のレジリエンスに注目することが重要であることを、自身が見聞きしたことを思い出しながら確認することができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

近年、日本では地震や災害が多発していて、「自然災害は予測不可能だから、被害を最小限にするにはそのために備えておくしかない」といわれる。ワークショップの始めの、人間が生きていくのに必要なもの」についての議論では、他のグループを含め多くの意見が出たが、普段いかに特段それらの多くについて気にすることもなく生活しているかに改めて気づいた。当たり前のようであったものがなくなるというのは恐怖であるが、「何がなくなったら生きていけないか」と同時に、「それがなくなった時にどう対応するのが良いか」について普段から考える機会を持ち、それについての情報を発信し、共有していくことは大切であると思った。日本では災害時の対応に関する情報の共有があまりされていないように感じる。

ペンギン村の事例に関するワークでは、『助けてあげ隊』の活動内容の問題点を指摘し、それを改善するにはどうしたらいいかを話し合った。このような議論ができるのは、実際の災害現場から離れているからではないかと感じた。実際、自分が支援のために現地に赴くことがあった時に、今回のグループワークで行ったように冷静に、客観的に、順序立てて物事を考えることが難しくなるのではないかと考えられる。そのような時のために、今回のワークショップのように事前には大変貴重であると感じた。またこの事例は、地震という自然災害による被災者の発生の事例であったが、紛争地の難民への支援ということになれば、また違う支援方法が必要だと考える。昨年ノーベル平和賞を受賞したナディア・ムラドさんはイスラム国の性奴隷として拘束されていたが、このように被害が目に見えにくいところで発生していたり、簡単に直接介入することができない場合にはどのような支援が可能であるか知りたいと思った。

グループワークでは、必ずこうするのが正しいと言う、確固たる正解がないような問題について様々な人の意見を聞くことができた。印象に残ったことは、支援法や解決策がただ一つに決まっているのではなく、被災者の支援のニーズに合わせて、支援者側が様々なアプローチをすることが可能であるということであった。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

ワークショップの中で人道支援の基本原則について学んだ。支援者自身が宗教的背景を持っている場合（例えば、支援者がキリスト教徒やイスラム教徒などである場合）、ある宗教の信者に嫌悪を持っていたり、若しくはある宗教の信者に好意的であったりする場合、被災者に対する対

応が異なってくるのではないかと考えられる。完全に何からも干渉を受けず「独立」であるということは人である限り不可能であるが、支援者の心得として、そのような潜在的な偏見がある可能性があることを自覚した上で公平な支援を行うことが重要だと考える。

また、もし災害が発生し支援が必要な地域がジェンダー不平等の地域（ジェンダー平等の価値観が無い地域）であった場合はどのように支援するかについて考えると、支援者が「公平」の原則に則って支援を行うのであれば男女平等を前提としているため、「男女は平等でなければいけない」という価値観（思想）をその地域に押し付けることにはならないかと思った。例えば、「この地域では男性の地位が高いから、家庭内に男性が多くいる家庭に食糧を多く配布してくれ。」と被災者から言われた場合、「私達支援者の価値観では男女を平等に扱う決まりとなっているので、男女関係なく家族の人数に応じて食糧を配付します。」と言うことは必ずしも被災者側のニーズに応えているとは言えない。被災地域の価値観と支援者側の価値観の相違によって問題が生じることがあるのではないかと考えた。

ペンギン村の事例でもあったが、災害現場での撮影に関して、確かに人権侵害であったり、尊厳を傷つけたりする場面はあるが、一概にいけないことであるとは言い切れないのではないかとと思う。ピューリッツァー賞を受賞した『ハゲワシと少女』の撮影者ケビン・カーターは多くの非難を浴びたが、このような悲惨な状況に身を置く少女が存在しているということをこの地にいない人に伝える手段として写真を用いることは意味のあることであると考えた。

「Refugees Only（難民以外お断り）」の状況について、難民は注目されるが、難民を受け入れている地域に住む一般の人は注目されないというのは納得した。注目されないから問題がないとは必ずしも言えない。例えば「（難民キャンプに）モンスーンの季節が刻一刻と迫っています。自然災害から難民を守るために皆様のお力をお貸しください」とインターネット上で寄付を募っていたところがあった。確かに、難民キャンプは簡易住居であるためモンスーンが来れば被害はより大きくなるであろう。しかしモンスーンの被害を受けるのは難民キャンプだけではなく、その地域全体であるのに、それが見えづらくなっているのは「難民のみ」と支援の対象を限定することで、他の支援を必要とする人々が見えづらくなるためであると考え。そうすることで国籍、人種、宗教、社会的地位、政治上の意見によるいかなる差別も行わず、いかなる不利益も与えてはならないという人道支援の基本原則の「公平」に反する事態に陥ってしまうと思う。日本でも同じように震災の被災地でも、震災直後は被災地以外の人々の被災地への関心が高かったが、震災から何年も経つと完全な復興が成し遂げられたわけではないのに風化して、問題はなくなったかのように思われる。しかし目に見える所だけでなく、目に見えていない所にも支援を必要としている人がいて、実際はそこにいる人々こそ、より支援を必要としている可能性があるのを心に止めておかねばならないと感じた。

【参考 URL】

<https://www.japanforuncr.org/lp/rohingy>

内藤 百合子

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

これまで平和構築や紛争解決などに興味を持って勉強してきたが、今回のセミナーで扱った内容については聞いたことがなかったのでとても興味深かった。同時に、これまで知らなかったということから、私の情報の集め方に課題があることを実感したと同時に、日本でのスフィア・スタンダードや CHS の普及がどのように行われているかにも興味が湧いた。これまでに受けた授業などで扱われていないことから、国際協力に興味のある学生に対してもっと広めることも重要なのではないかと思った。

内容に関して、講義の最初に人権や人道支援に関する用語の定義を細かくかつ分かりやすく説明していただいたことで、今まで曖昧に使っていた言葉を見つめ直すことができた。今後物事を論じる際に自分がその言葉をどういう定義で使うのかという点も留意することが必要だと学んだ。自分が将来人道支援や被災地支援をする際に変えていく説明責任と支援の質について、改めてどれだけ責任の重いことであるのかを実感した。「支援する」ということはそこにいる当事者の状況を「変える」ことであり、そこにいる一人一人の人生を変えることだと再認識した。また「変えられない」「改善できない」のに支援者にはなれないとも思った。自分が支援にどれだけの専門性と責任、思考、連携を持って臨むのかということの重要性を感じ、ますます勉強への意欲が高まった。9つのコミットメントと質の基準については、受援側と支援側両方からの視点で定義がなされており、それによって支援者側の主体性がしっかりと表現されていると思った。この双方の視点を忘れてはいけないと思った。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

今回のセミナーは受講者参加型である。インプットしたことをきちんとアウトプットできるようになるところまでプログラムが組まれており、講義だけでは終わらない更なる学びの機会が作られていたと感じた。午前中に行ったペンギン村の事例の検証では、グループで話し合うことで、一人で資料を読んだときには気付くことのできなかった点に気付くことができた。また、その後のフィードバックの中で更に、グループで話していても自分が気付かなかったことを指摘していただき、人道支援やその他の問題を多面に見ることの重要性と難しさを感じた。

午後の「9つのコミットメントと質の基準」に関するグループワークでは、まず自分の言葉で定義をし直すという工程があり、それがより私たちの主体的な参加を求めることに繋がると思った。どれだけ吸収しようという気持ちで参加しているか、自分のこととして理解をしようとしているのかが問われていると感じ、普段からこのような意識を持って学ぶことが重要だと感じた。その後の寸劇では、いかにして基準と現実の問題とをすり合わせていくかを考える良い機会となった。支援の現場ではすべての基準を合わせて多面的に考えることが必要だが、1つのグループが担当したのは1つの基準だったことで、まずは1つのことに注目し、その後どのように他のこ

と関連付けていくのかという、考え方の道筋を学ぶことができたと思う。1つの基準に集中したことで他の基準を忘れることのないように、それぞれの基準と基準が関係しあっている様々な事例を基にしたフィードバックをいただけたこともとても良かった。そこから、グループワークに対する指導者のフィードバックの重要性も感じた。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

主に日本における災害被災地での市民ボランティアにはこのような基準が伝えられているのかが気になった。ボランティアセンターによってボランティアの方々の統合、連携が図られているが、その際にボランティアの方々にどこまでの責任を求めるのか、ボランティアによる支援の質をどのように捉えていくのかということも重要だと思った。

ボランティアの質について考える中で、自分にできることは何なのだろうかという問いがますます大きくなった。自分は国際協力に関する仕事に就きたいと考えているが、それまでの間、または市民社会と国際社会やアクターとの連携について考えるときに、市民にできることが何なのかという問いはとても難しいと思った。社会の中では市民にあたる人が一番多いため、その人たちの力を結集することによって大きなインパクトが得られると思うが、どのようにして力を発揮していけば良いのか、誰が主導するのかといったことについて考え、現状の分析とそこからの提案を目指したいと思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は国際協力におけるアクター間の連携に興味があるため、今後は今後学んだスフィア・スタンダードや CHSを中心にした見方からアクター間の連携について考えてみたいと思った。また、復興や政治、長期的計画における市民の参加をどのようにしたら実現できるかということも考えており、その点でも今回学んだことを活かしたいと思った。

またこれまで私は、支援団体間の連携と支援を受ける人の意見の反映が特に重要だと考えていたが、それだけでなく、9つの基準のすべてが相互に関連しておりどれも欠かすことができないと学んだ。今日の難民問題においては、その国の政治的なアクターが機能していないことが多く、その場合に国際社会と市民がどのように関わっていくのかについて、今回学んだ基準を基に、より具体的にどのようなプロセスでアクター間の連携が行われているのかを調べたいと思った。

河原 瑞穂

奈良女子大学 文学部人文社会学科 2 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

講義を通して、現場の現状に即した、本当にニーズに合った支援をすることの必要性とその難しさについて学ぶことができた。またその過程で、自分自身が今までいかに何も知らなかったかに気づくことができた。例えば、支援者団体同士の連携が取れていないと必要な場所に必要な物資が行き渡らないことや、善意だけでは被災者には迷惑にもなりうるという点に注意が向いていなかったことなどである。特に、支援をする側はされる側と同じ目線に立つて行すべきだと思っていたが、支援者側の方が圧倒的に力を持っていることを考えると同じ立場にはなり得ず、現地の人の生活に立ち入って環境を変化させているという自覚と責任を持って動かなければいけないことを念頭に置くことの重要性や、その活動によって影響を受ける人々への配慮や責任を持って権力を行使する説明責任（accountability）についての話は新しい知識だったのでとても印象に残った。



(印象的だった図①現場に即した支援の必要性)



(印象的だった図②ホストコミュニティへの支援の必要性)

また、CHS 中の 9 つのコミットメントやスフィア・スタンダードの存在など、国際基準が少しずつ変化・改善されながら設けられていることによって、その時々で変わりゆく世界の現状に合わせた支援へ形が変わってゆく、スフィアも変わり完成形はないというお話が非常に印象的だった。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

私のグループは、私以外全員お茶の水女子大学の方だったが、意見を出し合うときにも私が思いつかなかったようなアイデアがたくさん出てきて、積極的な姿に刺激を受けた。また、ペンギン村の例についての改善ポイントの話し合いでは多くの意見が出たため、大学生でもこれほどの気づきを交換することができたので、実際の支援の現場でも支援者団体間できちんとした話し合いが行われるならば、より必要とされているものを最適な手段で提供できるような環境を整えて

いけるだろうと感じた。一方で、9つのコミットメントに関する寸劇の場面で他のグループを見たり、自身のグループの準備をしていた時に、どこまでの少数派の人々の意見を取り入れるのか（合わせるべき“ニーズ”の範囲はどこまでなのか）、予算以内に収められるのか、より多くの人への支援とより必要としている人への支援どちらを優先すべきなのか、といったことにどのように優先順位や折り合いをつけていくのかは非常に難しい問題になるのではないだろうかと感じた。その時の現場の状況によって大きく変わるであろうこの問題は答えとなる基準を設けることはできないはずなので、現場では答えがないということの難しさを知れたように思った。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

人道支援、と聞くと以前まではどちらかというと紛争地での物資配布やインフラ整備のようなことが一番に頭に浮かんできていた。しかし今回のワークショップや講義の中で、そういった大きな活動だけでなく現地で「人間」の生活を支援しているという自覚もとても大切になるということ強く感じた。例えば、五十嵐さんがお話されていた授乳用のスペースを確保するための仕切りを作る、といったようなことである。個人個人の過ごしやすさなど後回しになっても仕方がないという考え方も、緊急時には当たり前と考えられるかもしれないが、最低限のプライバシーが守られ、それぞれの現場に即して尊厳の守られる居場所を提供することもきちんと意識されなければならないと感じた。また、もし自分がこういった現場に携わることがあれば、全般的なことだけでなくそういった細かい配慮も同時に考えた支援を提供できるようにしたいと考えた。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回初めて人道支援とはどのような活動か、何を大切にしなければならないかを学ぶことができたので、これを入りに実際に今まで行われてきた支援活動の内容や、現在支援が必要な現場で何が行われているのかについても調べようと思った。まだ勉強不足だと感じることもばかりで刺激をたくさん受けたため、これから学び続け、いずれは国内外の支援現場での人道支援に関わりたいと思う。

宮田 佳那子

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科社会学コース 2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

もっとも強く印象に残っているのは、支援をする際に地域の対応力を強める形に持って行かなければならないということである。これは、スフィアプロジェクトの3つめのコミットメント「被災した地域社会や人びとは、人道支援の結果、負の影響を受けることなく、よりよい備えや回復力（レジリエンス）を得て、より安全な状態に置かれる」という項目にも該当する。支援す

る側がその地域全体の未来まで俯瞰し、現時点での最善ではなく長期的な意味でその地域とそこに暮らす人びとのためになる方法を模索しつつ、支援を行うのだという点に大きく感銘を受けた。

グループワークや討論を通じて学んだこと・印象に残ったこと

ペンギン村の例がわかりやすく、かつ重要な要素が全て詰まっていて非常に興味深かった。支援をするという行為自体に「よいことである」というバイアスがかかってしまっているため、このように批判的な眼差しを持って支援という活動自体を捉えるというのは、現場でとても重要なプロセスなのではないかと思った。また、一緒に作業をしていた奈良女子大学の学生の方がジェンダーにとっても敏感な視点を持っており、無意識のうちに普段自分の大学で学んでいることが自分の意見の前提になっているのだということに気が付いたのも、また面白かった。最後の寸劇では、応用が利くものにするためにやや抽象的ともいえる表現がされた各コミットメントが、それぞれのチームの考えというフィルターを通して体現化されていた。それによって、自分も一緒に考える過程を味わったような気持ちになることができ、それによって、より実感としての理解が深まったと感じる。

全体を通して、グループや全体で共同作業や討論を行ったことによって、ひとりで行うよりも多くの知識や考え方を、体験的に学びとることができたように思う。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

おそらく、被災地域の人びとや紛争地域の住民を完全に支援される側として捉えて、すべての支援を自分たちで行ってしまう方が外部団体にとっては容易である。もちろんその分より多くの費用や人材が必要になるが、その仕事を地域の人に割り振るか頭を悩ませなくて済むし、似たような現場を何度も経験してきているプロが作業を行った方が効率よく問題を解決することができるだろう。全てをひとりでやるのが結局は一番早いというケースは、日常生活でもしばしば見られる。しかし、そうしてしまえば次にまた同じようなことが起きた時、地元住民は自分たちの力では何も解決できなくなってしまう。自分たちが関わっていないところで固められていく地域の防災に、誰が興味を持つだろう。住民同士の繋がりや当事者意識が薄くなってしまう状態が未来に待ち受けているのなら、たとえその時は素晴らしく見えても、それはあるべき支援の形とは言えないのではないだろうか。

私は、理想的な支援には、支援する側／される側という明確な区分は存在しないと考える。支援する側は、自分がいつかされる側になることを考えて、その地域のためになる選択を取ろうとし、支援される側は各自できる形で援助活動に参加して支援する側となる。こうした関係の流動性は、一種の隙のようなものとして、応用性を高め、人々の考えや態度を柔軟にする。地域のレジリエンスをつけようとしてとっている行為自体に、それを行う人々をレジリエンス化する作用があるのではないだろうか。

今後の学習や研究に向けた抱負

今学期履修している授業の中に「都市社会学」という科目があるのだが、つい最近その授業の中で災害と都市、またボランティアなどの人々の関わりがテーマの1つとして取り上げられていた。その中で、「復旧」と「復興」の違いについて、「復旧」は災害が起きる前の状態に戻すこと、「復興」はその災害の教訓から地域がさらに前進することであるという話を聞いた。今回の講義を受け、支援の形としてあるべきなのは、その地域の「復旧」ではなく「復興」を目指すことだと思った。そのためには、地域のコミュニティの力を大切にしていける必要があると考える。特に都市部において、ライフスタイルや社会構造の変化に伴い、住民同士の関わりが薄くなっているということが言われている。そうした変化が起きるのはある意味必然的なことで、私はそれを完全に“昔”に戻すことが正しいことであるとは思えない。しかし、やはりそうしたつながりがなくなっていくことで、地域に所属しているという意識がなくなってしまうのは大きな問題なのではないかと思う。前述したレジリエンスを身につけた、しなやかで柔軟な地域を作るためにはどういった取り組みができるのか、またそういった取り組みに市民自らが加わり継続していけるようにするにはどうしたらいいのか、今後研究していきたい。

林 彩夏

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 1年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

講義を通して最も印象に残ったことは、人道支援において質と説明責任が重視されることである。質とは、「人道支援の全体的な特色、特性、能力。はっきりと表現されているニーズ、表現されていなくても必要なニーズ、期待について、人道支援が適切な時期に応えることができ、かつ支援対象者の尊厳を尊重すること。」(CHS)と定義されている。支援対象者のニーズに合った支援をすべきだという認識はもちろんあったが、それでもどんな支援であっても無いよりはマシだと思っていた。どんな支援であってもほぼ善意から行われるものなので、支援者の責任というものを意識していなかった。ライツ・ベースド・アプローチという言葉も今回のワークショップで初めて耳にした言葉で、被災者には尊厳ある生活を営む権利があり、従って援助を受ける権利があるというものである。被災者のニーズを見極めることが難しく、支援がかえって迷惑なものになってしまったり、支援後のフォローが不十分・不適切であったりするために被災者が不利益を被ることもあるだろう。また、尊厳ある生活というものも改めてどのようなものか言葉にしようとすると難しさを感じた。私たちが普段送っている生活が尊厳ある生活に当たるということだが、それを実現するための支援を行うとなると何をすべきか分からなくなる。講義の中で授乳のための仕切りを持って行ったという例を聞いて、私は食糧や衣服など最低限の生活ができるようなものしか思いつかなかったのが驚き、被災者の尊厳を尊重すること、そして、多様な視点

を持つことの難しさを学んだ。次に説明責任とは、「責任を持って権力を行使するプロセス。すなわち、様々な関係者・団体、特に支援活動によって影響を受ける人々に配慮し、責任ある支援活動をする。」(CHS)と定義されている。支援における説明責任という言葉自体初めて聞いたが、定義にある権力という言葉が印象的だった。支援において、支援者の立場が強くなってしまふのは仕方がないことだが、それはできる限り無くして被災者と同等の立場に立てるように努めるものだと思っていた。しかし支援者は権力を持つので支援活動に責任を持たなくてはならないというのは衝撃だった。また、権力を持つからこそ支援によって被災地の状況を変えなければならないというのも印象に残っている。私は、支援は被災者の手助けになるもの、一時的に生活をつなぐものだというイメージを持っていた。復興を進めるのはあくまで政府の仕事であり、支援によって状況を積極的に変えていかなければならないという考えはなかった。講義を通して人道支援の根底にあるものを学ぶことができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

グループワークを通して、支援は複合的なものであるということを強く感じた。人道支援はそもそも、人道性・公平性・独立性・中立性の人道4原則によって行われており、さらに9つのコミットメントと質の基準が設けられている。コミットメントとは、「支援団体および支援者に対し、支援を受ける地域社会や人びとが期待すること」という受援者側の視点、質の基準とは、「コミットメントを実現するために支援団体および支援者側が達成しなければならないこと」という支援者側の視点によるものである。グループワークでは、ペンギン村でのNGOによる食糧配布という架空の事例をもとに、前半では問題点を指摘し、後半では9つの基準に即してどのように改善すれば良いのかを話し合っ寸劇で発表した。私は9つの基準のうち、「人道支援が地域の対応力を高め、負の影響を未然に防いでいる」という部分の担当だった。この基準に沿って改善しようとしても、考えれば考えるほど別の基準と重複するところが生じてきた。寸劇を発表していった時もすぐにどの質の基準が分からないことが多く、支援には複数の質の基準が関わること、そしてより良い支援を行うためにはより多くの質の基準を満たすことが必要だということを実感した。寸劇では考えをうまく表現することができず、短時間でわかり易く考えをまとめること、そしてそれをそのまま相手に伝えることの難しさも感じた。また、講義の始めに生活に必要なものを挙げていくという活動もした。おそらく今回のワークショップのテーマが人道支援だったために、私は「これは生活に必要な最低限のものを挙げていくものだろう」と思い込んでいた。私の中で、支援は最低限の生活を守ることという認識があり、被災者の尊厳を無視していたことも実感した。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

紛争・災害時の人道・緊急支援では、支援者側が被災者の尊厳を守る支援をするのは言うまでもないが、被災者側が尊厳ある生活を営む権利があり、援助を受ける権利があることを知るとも必要だと考える。大抵の場合、権利が生まれると同時に義務も生じる。被災者が自身の権利

を知ることを義務というつもりはないし、知らなければ支援を受けられないということはもちろんありえない。被災者が支援を受けられるのは当然のことである。しかし、被災者が自身の持つ権利を知ること、被災者にも支援者にも利点があると考え。9つのコミットメントと質の基準のうち、「被災した地域社会や人びとが安全に苦情や要望を述べることができ、迅速な対応を受けられる。」「苦情や要望を積極的に受け入れ、適切な対応をしている。」(CHS)という部分は達成率が低く、被災者と支援者の立場に差があるために被災者が声を上げられないことが理由としてあげられると学んだ。もし自分が被災者となったら、支援を受けている身で要望を述べるのも難しいのに、ましてや苦情など口にできないと思う。しかし、支援を受けることも尊厳のある生活を送ることも正当な権利であると被災者が理解し、支援者と共通の認識を持つことができれば声を上げやすくなると考える。そしてそれがより良い支援に繋がっていく。今日、特に日本では自然災害が頻発しており、被災者となるのも支援者となるのも仮定の話ではなくなってきている。自分がその立場に置かれる前に、正しく権利について理解することが今、私たちに手輕にできて、そして非常に重要なことであると考え。

立石 桐子

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科教育科学コース2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

講義を通して最も印象に残ったのは、説明責任 (accountability) についての説明の際、「支援する側と支援される側で権力に差がある」と先生が断言したことだ。最初は直感的に何となくそれは傲慢なのではないか、被災者のことが見えなくなっているのではと感じたのだが、考えてみれば被災した人たちが被災していない人たちより力がないのは当たり前のことである。「私なんか力になれるのか…」という考えこそが自己中心的であり、「支援者であるということは変える力を持っていることだ」という先生の言葉は強く心に残った。何より、支援者がその立場であることを自覚した上で支援活動の影響を受ける人びとに対して配慮し、責任ある支援活動をしなければならないということ、すなわち説明責任について、その重要性を学ぶことができた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

南極共和国ペンギン村での地震被害を想定した『助けてあげ隊』の緊急支援について、その問題点を挙げていくグループワーク、それらの問題点に対し、人道支援の必須基準 (CHS) の9つのコミットメントに照らし合わせた解決策を寸劇で表すグループワークの2つを主に行った。これまで幸いにも被災したことがなく、そして緊急支援の場にも関わったことがない私にとって、改めて支援の流れの一例に触れられたことで人道支援の基本原則やスフィア・スタンダードの実際の場面を想像しながら理解することができた。それらのワークを通し感じたのは、支援をする

ために配慮するポイントがとても多いことである。私が寸劇で解決策を表すグループワークにて取り組んだのはコミットメントの3「被災した地域社会や人びとは、人道支援の結果、負の影響を受けることなく、よりよい備えや回復力（レジリエンス）を得て、より安全な筐体に置かれる」だったが、寸劇では被災者による配給をめぐる抗争が起きたことを負の影響とし、配給場所を細かく分けることで殺到する人数を減らしたり、「お隣さん」への意識を細分化により高めたりすることで自主的に優先順位を認識し暴動を未然に防ぐということを表現した。しかしながら、細かく分けるということはそれだけ場所の確保や人員の確保が必要であり、優先順位を表すリスト作りも丁寧に行わなければいけない。さらに、細かく分けたとしても地域によって被害には偏りがあることが予想され、配布するものを一律にすべきかどうかもある必要がある。あくまで想定のものであるが、グループで意見を出し合ったことであらゆる角度から問題を見つけ解決策を考えることができ、NGOがどのように緊急支援に取り組んでいるのかの一端を見ることができたのではないと思う。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

上記のように私はコミットメント3についてグループワークで取り組んだが、紛争・災害時の人道・緊急支援においてよりよい備えや回復力を得ることは被災者の尊厳を守るためにとても重要なことであると考えた。講義で挙げられたウサギの着ぐるみを着せられた被災者の例のように、ただ与えられる状況に陥ってしまえば支援が応急的なものにすぎず人間としての尊厳は守られない。自らの力を取り戻し、次に備えられるようにすることが、人道支援をする中で念頭におかなければいけないものなのではないか。そして、支援者が持つ「変える力」はそれに向かって使わなければならないのではないだろうか。

池田 陽香

お茶の水女子大学 理学部生物学科1年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

もともと、災害時の人道支援と紛争時の人道支援とは根本的に違うと思っていたため、講義を受ける前はいったいどこに共通点があるのかと不思議に思っていた。今回講義を受け、人道支援の根本的な考え方が分かった。それは「支援されるすべての人の生活をより良いものにする」ということだった。

どうしても支援の際、「自分は支援されている側だから、これは我慢しなくてはいけないかな」や、「自分は支援する側だから、被災者（避難者）はこちらの言う通りにしてもらわないと困る」などと考えてしまいがちかもしれない。しかし、本来はそうではなく現地のニーズに合った支援をすること、支援をどう行っていくかの適切な説明をすることが大切であるということがよく分

かった。

また、これまでは考えてもみななかった、「短期的な支援を長期的な支援につなげる」ということ、「他団体と連携、協力する」ということ、「その他の地域と自分の住む地域の文化、伝統の違い」も考えながら支援をする必要がある、ということも初めて知った。

支援者はその地域の人が平等に適切な支援を受けさせ、着実に結果を出すことが求められている。このことに関して、「何のために支援しに行くのか、『自分なんてそんな大層なことではない』と言っているなら支援者として現地に赴く必要はない」という講師の言葉がとても印象に残った。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

9つのコミットメントと質の基準という項目が支援するにあたり覚える必要性があるものだった。それぞれ細かく書かれているように見えて、実は「人道支援の基本原則」に書かれていることよりも分かり易く、かつ本質をついて書かれていた。9つのコミットメントについての寸劇を作り全体で共有した際、元々1項目についての寸劇のはずが、「よりよい支援とは？」と考えていくうちに様々な項目に関連する寸劇が出来上がっていたことが印象に残った。これはつまり、9つのコミットメントは人道支援において最も重要であり、それらに則って行動していけば良いということにもなる。しかし、講師の先生が「支援者は毎回反省会を行い、それ以降同じ過ちを繰り返さないようにするのも必要である。」と仰っていたことが共感できた。確かに今回ただの寸劇であるにも関わらず、様々な疑問が生じたり、ペンギン村での事例に関し最初は何とも思っていなかったことにもグループで話を進めていくうちに「ここも悪いのではないか」と様々な点に気付いたりするようになった。それらは多種多様であるため、全ての事例の対応策をスフィア・ハンドブック等にも書くことも現実的とは言えない。だから支援者が自らぶつかった課題に関して考え、その時その場所で最善の解決策を見つけること、またその結果を周りの仲間と共有することが必要だと思った。このようにすることで、そう考えたプロセスやその結果起こった新しい課題をふまえて、また同じような課題と直面した時により良い対応ができるようになるため、マニュアル化するよりも効果的に支援ができるため、とても良い考え方だなと思った。

紛争・災害時の人道・緊急支援について考えたこと

私が最も印象に残っているのは「人道支援」の基本原則についてである。人道、公平、中立、独立の観点で紛争・災害時の人道支援について書かれていたが、全体を通して「どんなに緊急的な状況でも、人間の尊厳は守られる」ということが根底にあるなと思った。それは「人道支援の基本原則」以外にも言えることで、「人道支援の質」や「説明責任」という概念が存在するのもしかなる場合でも人間の尊厳は守られるべきものであるからだと思った。

私はこれまでボランティア活動に参加した経験がないため、実際の避難所等での様子は完全には理解できていない。ただ今回の講義を受けて一番大切だと思ったのは、支援者と被支援者がそれぞれの立場を十分に理解しておくことだ。あくまでも人道支援は支援を受ける側を中心に考え

行動する必要がある。しかしながら、人道支援の際に力が大きいのは支援者側である。つまり、支援者はやり方によっては、被災者をより傷ついたり、大変は目に遭わせたりしてしまう可能性があるということだ。だから、支援者は自分の持つ力の大きさを理解し、それを安全に適切に行使する責任があると思った。

また、スフィア・ハンドブックという国際的に共有されている人道支援の基準があるのも初めて知った。これまで、人道支援はその支援団体が所属する国や地域によって大きく違うのだらうと思っていた。しかし、このスフィア・ハンドブックの存在を知り、思っていたより細かく、そして様々な言語にも対応しており、人道支援をより良いものにしていこうという思いが伝わった。災害の多い日本でもこの本の存在は知らない人が大半だと思うから、もっと多くの人にこの国際基準の最低限のポイントを伝えていく必要があるのではないかと思った。そうすることで、支援をする側も円滑にかつ効果的に支援を行え、それによって支援される側もより良い支援を受けることができると思う。

竹内 美那

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 1 年

私は今回のワークショップを通して、人道支援とは何かの基準を学び、新たな視点を得ることができた。講義の始めに映し出された風刺画が強く印象に残っている。被災者にうさぎの着ぐるみを渡し「何も無いよりはマシでしょ？」と書いてある絵だ。この絵から、支援は支援される側ではなく、支援者を中心とした活動に陥りやすいことが直感的に理解でき、スムーズにテーマに入り込むことができた。また、無意識のうちに私も支援者中心の考え方になってしまっていないかを見つめなおすきっかけになった。本当に被災者が必要なものは何か、人道、公平、中立、独立の基本原則を守りながら質の高い支援をすることの重要性を知ることができた。また、被災地が回復するための支援は前提としてその地域の政府が行うことであり、その範囲を超えた場合に初めて外部の者が支援するという話を聞き、よく考えれば基本的なことかもしれないが、非常に印象的だった。その地域の回復力を信じることも大切で、例として、食糧の援助をし続けることによって住民が市場でものを買わなくなり、本来回復するはずの経済力を妨げていたため、すぐに食糧援助を中止したという支援慣れの事例が分かりやすかった。9つのコミットメントを参考にして、ペンギン村の支援の改善策を劇にするコーナーでは、1つのコミットメントを満たす過程で、他のコミットメントの要素も入っているグループがいくつかあり、9つのコミットメントは相互作用が働いていることを実感した。また劇を作るときに、この改善策は適当なのか、そもそもなぜ最初にこの方法を選んだのか、考えるほど多くの疑問が出てきた。そのうえで、これが実際の現場だったらより複雑で、さらに問題が発生する可能性を考えると、いかに現場で活動することが大変か想像するきっかけとなった。お互いの劇を鑑賞し、それぞれがどのように今日得

た知識を消化しているのか知ることができ、充実していたと思う。先生方の劇の講評と、その内容に関連させて実際の現場ではどうしているのかという説明は興味深く、より知識を深めることができた。現在は支援の垣根が低くなり、様々なボランティア団体が支援している。私たちは被災者にも、支援者にもなる可能性がある。そのため、私たち一人ひとりが人道支援の質について知り、どうあるべきか考えていく必要があると感じた。

4. 資 料

(1) 参加者アンケート集計結果

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

LA 科目「NPO 入門」の履修者には本イベントの参加が推奨されていたため、「本イベントを知った経緯」として、指導教員または、ポスター/チラシ等の掲示が多かった。

「内容全般」については回答者 23 人中 14 人が満足、8 人がやや満足と回答しており、満足度の高いイベントであったと言える。

「開催時期と期間」については 15 人が満足、7 人がやや満足、1 人が不満足との回答があった。不満足の理由として、時間が長かったことへのコメントがあった。

「テーマの選択」については、19 人が満足、4 人がやや満足、「内容のわかり易さ」については、17 人が満足、6 人がやや満足で、今回のテーマの関心の高さと内容についてほぼ全員が満足している。また、記述部分から「今後、自分が支援する側になるかもしれないし、支援を受ける側になるかもしれない。今回のワークショップでは、そうした場面で何が必要かについて、学ぶことができた。」「災害時の支援は、被災者の役に立つ一方で、被災者の間に争いを生み出す可能性もあることが分かった。」「講師の方の人道支援の現場での実際のご苦労や失敗に基づくお話は、なかなか知ることができない貴重なお話だった。また、お茶大の他の参加者、他大学の参加者との議論を通じて、多様な経験、考え方を知ることができ、学ぶことも多かった。」とのコメントがあり、多くの参加者が、日本で多発する災害を踏まえ、当事者意識をもって人道・緊急支援の在り方について広く考える機会となったことが分かる。

本イベントを何で知りましたか（複数回答）	計
ポスター／チラシ等の掲示	20
大学ホームページ、Facebook、Twitter、Ochamail	0
「共に生きる」スタディグループのメーリングリスト	3
教員の紹介	16
その他	1

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／適当	15
やや満足／適当	7
やや不満足／不適当	1
不満足／不適当	0

本イベントの感想（会場）	計
満足／適当	20
やや満足／適当	3
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／適当	19
やや満足／適当	4
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容のわかり易さ）	計
満足／適当	17
やや満足／適当	6
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	14
やや満足／適当	8
やや不満足／不適當	0
不満足／不適當	0

その他（感想）
ワークショップ、グループワークで実際に改善策を考えたり、それにコメントをいただいたりしたことで、自分には関係のないことという意識がなくなったように思う。
今まで、被災者支援は被災者の方にとり全て役立っているものだと思っていたが、そうではなく、かえって争いを起こしてしまう場合もある。支援の難しさを学ぶことができ、自分の考えを改めることができ本当に良かった。
良かれと思って行った支援も被災者にとっては迷惑になると聞き、支援する側と支援される

側でしっかりコミュニケーションをとることが大切だと気付かされた。
ペンギン村の例を検討しながら学ぶことで、スフィア基準を守らないことによる不都合や、文章だけではスフィア基準は当然のことのようでも、実際の現場では守れなくなってしまうことが分かり、スフィア基準の必要性を感じた。
スフィアやCHSがどのようにしてできたかをもっと具体的に聞ける時間があっても良かったと思った。
充実した内容で、私たちが考えていたことを全体で共有する時間もあり、学びが深められたと思う。ペンギン村の内容を踏まえて自分たちで解決策を考えたこと（寸劇のシーン）が特に役立った。
実際に支援する立場になって「人道」的な支援というものを考えるとき、非常に難しく迅速な判断が求められるので、考えていて少し緊張した。9つのコミットメントのそれぞれの視点から、「助けてあげ隊」の対応を考え直したのが勉強になった。
スフィア・スタンダード。初めてその存在を知った時、不変のバイブルのようなものだと思っていたが、長年培われてきた経験をもとに時代に合わせて変化していることに驚いた。
実際の現場での経験からお話していただいて、自分は災害現場での支援をした経験はないが、わかり易く、今まで考えていたことを考え直すことができた。
「支援が対象の人を変える」という言葉が心に残った。それくらいの気持ちを持って支援をしないと意味がないと思った。9つのコミットメントは支援をするにあたって一番大切だと思った。
人道支援の入り口を知ることができた。良いことである反面、様々な問題も発生する可能性があることを学べてよかった。コミットメントに沿った支援を考えることで、より深く学ぶことができた。

(2) 写真



講師の五十嵐豪氏



講師の福田紀子氏



架空の支援事例を元に問題抽出のグループワーク



人道支援の歴史、原則についての講義



支援の質向上のための9つのコミットメントについてのグループワーク



架空の支援事例の改善策の検討(寸劇と議論)

「『対話型ファシリテーション』を
用いた途上国の人々との話し方」
実施報告書

目 次

	ページ
1. 活動の概要	61
(1) 活動の目的	
(2) 実施日時	
(3) 実施場所	
(4) 講師	
(5) プログラム概要	
(6) 参加者	
2. 講師報告書	65
3. 参加者報告書	69
4. 資料	97

1. 活動の概要

1. 活動の概要

(1) 活動の目的

本イベントは、「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業の一環として実施する大学間連携イベントである。

国際協力の現場における課題発見・解決を促す実践的な手法である「対話型ファシリテーション」(※注)について参加学生が学ぶとともに、このような対話法を用いることで、現場に存在する根本的なニーズの把握が可能となり、その結果、外部者による援助の在り方に影響を与えるということを疑似体験し理解することを目的とする。また、将来的には、参加者各人の学習・研究・実践の様々な場面で応用できるようになることを目指す。

平成 27、29、30 年度と本ワークショップを実施し、フィールド調査を実施する学生にとって多くの重要な内容を含むものであったことから、今年度も実施したものである。

※注：「対話型ファシリテーション」とは、開発途上国の人びとの生活の改善を目指す国際協力活動の場で、当事者と協力者が対等な関係をつくり、当事者による課題発見・解決を促す実践的な手法。

(2) 実施日時：2019年7月6日(土曜日) 10:00～17:00

(3) 実施場所：お茶の水女子大学 大学本館 135 室

(4) 講師：特定非営利活動法人ムラのミライ

海外事業チーフ 前川 香子氏

(5) プログラム概要：

インド、ネパール、セネガル、飛騨高山で地域資源を生かしたコミュニティづくりに取り組む NPO 法人ムラのミライの海外事業チーフであり、インドなどにおいて農村開発や住民主体の自然資源マネジメント等に長年携わってきた前川香子氏を講師にお招きした。

ワークショップでは、開発途上国の現場におけるフィールドワークの考え方と進め方について、ムラのミライの経験に基づき、具体的なイメージが持てるような内容が提供された。ムラのミライが実際に直面した、農村等における支援ニーズの把握において、支援者と被支援者の関係性の中で答えを誘導してしまい、その結果、ニーズに基づかない支援を行うという経験と、それへの対応として開発された「対話型ファシリテーション」(対話を通じて、当事者による課題発見・解決を促す実践的な方法)について、講義を受けるとともに、グループワーク等を通じてどのように質問を展開するのがよいのかを実際に体験した。

ムラのミライの途上国での失敗を含む経験や実際に質問を展開するグループワークを通じて、以下のような点について理解が進んだ。今後、途上国に限らず、フィールド調査を行う学生にとって参考になる、具体的な内容であった。

- ・ NGO（支援者）と村人（被支援者）、外国人とその国の人、といった関係性の中で、村の生活状況についての事実関係を質問しているつもりであっても、一定のバイアスがかかってくる。（例：村の生活状況に関する質問に対して、支援に関する内容が回答される、「脆弱な村人」というイメージの回答がなされる、等。）
- ・ 上記は、先進国対途上国という力関係を前提とした関係性に陥りがちであるということにも通じる。
- ・ 相手の考えを聞く質問をした場合、上記のような関係性が反映され、ステレオタイプの村人のイメージ（脆弱で依存した農民）が共有されるということが起きてくる。
- ・ しかし、事実関係についての質問を重ねる（例：早魃で仕事が減っている農業労働者に対して、「一番困っていることは何ですか？」ではなく、「それでは今、何をしているのですか？」と尋ねる。）ことを通じて、ステレオタイプにとらわれない村人象を捉えることが可能になる。
- ・ バイアス、ステレオタイプにとらわれないためには、事実に関する質問を重ねていくこと、また相手の立場にたって、相手が話したいことを質問していくことが重要である。
- ・ 参加者は、お茶の水女子大学の学部生等と奈良女子大学の学部生が参加し、グループワークで多様な意見が交わされた。またこれまでの経験等について意見を交換する機会となり、刺激となった。

（6）参加者：

お茶大 学部生 15 名、大学院生 1 名（人間発達科学専攻 D3）、卒業生 1 名、

奈良女子大 学部生 5 名

（学部生内訳）

	お茶大			奈良女子大	
	文教育学部	理学部	生活科学部	理学部	生活環境学部
1 年	9	1	1	2	0
2 年	2	0	1	0	2
3 年	0	0	0	0	0
4 年	1	0	0	1	0
計	12	1	2	3	2

2. 講師報告書

研修報告書

1. 研修対象：お茶の水女子大学グローバル協力センター大学間連携イベント
2. 研修項目：「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」
3. 研修期間：2019年7月6日（土）10：00～17：00
4. 研修講師：前川 香子
5. 研修開催場所：お茶の水女子大学本館 135 室

・研修概要（実施方法等）

【午前】

1. 自己紹介および当会の活動紹介とメタファシリテーション（対話型ファシリテーション）を編み出す前の活動内容について（主に失敗例）
2. メタファシリテーションの基本的な考え方について
3. メタファシリテーションの基礎となる事実質問について
4. 事実質問ドリル

【午後】

5. 事実質問練習：ペアでの練習「これは何ですか」
6. フィールドワークのお作法（基本的な礼儀など、事実質問以外に気を付けるべきこと）
7. 事実質問練習：グループワーク（5～6人のグループを作り、それぞれでテーマを設定し、提示された写真を使って質問を組み立てる）

参加者構成としては、学部生から大学院生、社会人まで幅広く、また、途上国の経験値も様々だった。国際協力分野が全くの未経験であっても分かるよう、途上国でのコミュニケーションのありがちな事例を基に、取り上げるエピソードも分かりやすくなるように心がけた。今回も、メタファシリテーションの考え方やその基本となる事実質問の使い方を身に付けられることを狙って、内容を組み立て、新たな教材（ドリル）も用いた。

また、一方的な講義にならないよう、学生たちの経験を聞きだしたり実践してもらったりしながら、自由に発言できる環境づくりに気を付けた。

・所感

事前にいただいた、参加者の関心事や途上国の経験値などの情報が、内容を組み立てるのに大いに役立った。メタファシリテーションのコンセプトや事実質問そのものについては、去年までよりも、より具体的に講義できたのではないかとと思われる。1日限りの講義では、実際のインタビューでは使いこなすことは難しい。しかし、一人の学生が午後のワークの他のグループの発表に対するコメントで「最初は抽象的だった質問が、より具体的になってわかりやすくなった」と言っていたのを聞いて、事実質問を使ったインタビューの効果を分かってもらえたのではないかと感じた。

3. 参加者報告書

井出 麻季和

お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義では、今まで自分が当たり前だと思っていた途上国の方々への「質問の仕方」が実はあまりいい方法ではないということが分かった。従来の手法では、開発は途上国の人を支援することを目的とするため、支援者は実際に途上国に行き、支援をする人々の要望をもとに支援を行ってきた（例：支援者「何をしてほしい？」、村人「▽▽が欲しい」など）。しかし、それでは村人の「考え方」が先行してしまい、村の本当の実情に合った支援をすることができない。支援を実行しても失敗することが多いことが、いくつかの実例から分かっている（環境保全と食糧確保という村人の要望のためマンゴーの木を植えたが、村人たちがうまく世話ができなかったなど）。どうして失敗したのか。それは、村の実情に合った支援をしていなかったからである。そもそも、村人たちよりも村にいる時間が少ない外国人支援者が村の実情を把握するのは難しい。しかし、だからと言って「村人たちの要望」が「村の実情に合った支援」と一致するとは限らない。そこで必要となってくるのが今回教わった「対話型ファシリテーション」だ。これを行うことで村の実情である「村人たちの村人としての姿」や「村の本当の課題」が見えてくる。以下は、その方法である。

村人たちは支援者に「何をすればいいのか」と問いかねられると、支援ということを意識しすぎてしまう。自分たちが支援者よりも下の立場だと無意識に思ってしまう。だから、支援者と村人たちが対等な関係である、ということを知ってもらわなければならない。まずは、近くに生えている草の名を「これは何ですか？」と聞くことから始める。例えば答えが、「これは〇〇という薬草です」だとしたら、「あなたはこれを使ったことがありますか？」と聞く。「あります。娘が△△の時に使いました」、「娘さんが何歳の時ですか？」…。こうして村人が支援者に沢山教えることで村人の自己肯定感が高まり、村と支援者の対等な関係が成立する。同時に、等身大の村人の姿や村の姿が見えてくる。この聞き方をすることで、昔はあったものが今はない→□□が原因だろう→そのせいで今の●●問題が起こっているのだ、という事実に基づいた判断ができるようになる。

この事実に基づいた判断こそが、次の有用な開発につながっていくのである。この村人たちの実像を浮き彫りにする質問のコツは「村人自身の経験を聞く」こと。それも、「具体的に思い出せるもの」が望ましい。決して「気持ち、主観の入るもの」は聞いてはいけない。より良い開発をするためには、地道に村人たちに沢山のことを教わって、信頼されて、彼らの本当の姿を正確にとらえることが大切なのだ。

前述したことをまとめると、対話型ファシリテーションでは、① 村人と対等な関係を作ること、② 村人が「思い出せる」話を聞くこと、が大切である。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私たちのグループは頭の上に籠のようなものを乗せて何かを運んでいる女性と、後ろの木陰で座って何かしていそうな男性の写真を使い、写真の彼らへの質問を考えた。質問のテーマは「日常生活における、男女の間での活動の違い」だ。最初の質問は「頭の上のそれは何ですか？」から始まり、「何が入っているのですか」と続いた。しかし、だんだんと彼らの習慣に踏み込む質問、「豆はいくらで売っているのですか？」、「豆の値段は誰が決めているのですか？」という質問になった。これは失敗だったと思う。「対話型ファシリテーション」では村人の事実を聞かなければならないからだ。この質問のような「習慣を聞くもの」は事実と異なることがあるため、よい質問とは言えない（自分では毎日◇◇を食べていると思っていても、実際振り返ってみると、自分がいつそれを食べたか、具体的に何日前に食べたかを思い出せなくなっていたりして、習慣とは呼びづらいものまで入ってきてしまうため）。そのことに気づいてから、私たちは質問を昨日やったことに置き換えた。「昨日豆を売りに行きましたか？」「値段は誰が決めましたか？」という感じである。すると、一気に具体性が出て、村人の本当の姿が見えてくる気がした。この聞き方では、「昨日のこと」は聞けても、「習慣が聞けない」のではないかと思う人もいると思う。しかし、この聞き方だけでも習慣は聞けるのだ。そもそも、習慣とは毎日やっていることなのだから、質問した日だけ答えが違うということの方が少ないだろう。「昨日もそれをしましたか？一昨日もですか？逆に、しなかった日はありますか？」と聞くことで習慣は聞き出せる。対話型ファシリテーションはパツと見は使い勝手の悪そうな聞き方だが、うまく使えるようになれば支援先の現状を知ることができる最高のツールとなりうるのである。私たちのグループの最初のように、聞きたいことを抽象的に聞くのではなく、昨日の話など「思い出せる」話にして、具体的に話せる話を振るのが良いと言えるだろう。以上のことがグループ討論で失敗を通して分かったことである。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回の講義では「本当に地域開発活動が必要なのか」について考えさせられた。講義の中で、途上国の人はいきなり自分たちの生活の中にやってきた外国人に給料や家族構成などのプライベートな質問を一方的にされていい気はしない、という話が出た。さらに、支援者のことを自分たちよりも恐らく偉い人なのだろうと無意識に思ってしまう、気を遣わせてしまうということも聞いた。本当にその通りだと思った。もし自分だったら、そんな人に支援されたくないと思うだろう。そもそも、私たちの暮らしと形は大きく違えど、彼らは彼らなりの生活を送っているのだ。途上国の人々が、我々が思う豊かな生活を押し付けられる筋合いはないだろう。もし、開発をするにしても、彼らの協力あつてのもので、それを支援者が「開発してあげる」と考えてはならないと思う。彼らは、本当に支援が必要なほど困っているのか、今、私はそれについてもう一度考え直し悩んでいる。少なくとも、私たちがどうしても開発をしたいなら、彼らの生活に立ち入らせてもらえること、開発に協力してくれることに感謝しなくてはならないだろう。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は、今年の9月にカンボジアにスタディツアーに行くことになっている。開発の現状を村の人はどう思っているのか。例えば、役立っていると感じているか、生活にどんな変化が出たか、この開発を行ってよかったかどうか。これからも開発をしてほしいかなどを調べたいと思っている。「対話型ファシリテーション」はその調査に大いに役立つだろう。私の調査では多くの人にインタビューをすることが見込まれる。その時に、カンボジアの人々の感情を聞き出すよりも、彼らの実生活について聞き出すことでより正確な情報が集められると思う。スタディツアーまでの時間で対話型ファシリテーションが自然にできるようになるまで練習して、スタディツアーを有意義な調査にしたいと思っている。

伊藤 文海

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科1年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

この講義を受けるまで、自分と住んでいる国や文化が違う人に限らず、インタビュー調査というのはどのようなことを聞けばいいのか、どうすれば効果的なインタビューができるのかなど、全くと言っていいほど想像がついていなかった。そのような中、今回の講義に参加して、対話型ファシリテーションについて知り、調査として行う質問では“事実”を確認する質問をすることが大切だと学んだ。そのためには、“習慣を聞くのではなく、昨日のことを聞く”というように相手が考えて答えるような質問ではなく、思い出して答えられるような質問をすることが必要だと学んだ。意外だったのは「なぜ」「どうして」という一番聞いてしまいそうな質問はNGであるということだ。これらの質問は事実を確認するのではなく、相手の感情や考えを聞いてしまっているからだ。その後の活動による良く生かしていくためにも、事実質問を心がけたいと思った。

また、途上国の人々から見ると、日本人のような先進国から支援をしようと来る人々は“支援をしてくれる人”という見方もあるが、“支援をしたがっている人”と捉えられることもあるため、支援者＝被支援者という関係性から、質問の仕方によっては相手側に忤度をさせてしまい、真に必要とされている支援ができないということが起こりうる。「正しい事実を知ることによって、真の解決策を引き出せる」という前川さんの言葉通り、真の事実を引き出せる質問をしたいと感じた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

実際に事実質問を試みようとすると、意識しているつもりでも「どうして」という質問や、記憶があいまいなようなことについて聞いてしまい、事実のみを聞こうとすることがとても難しいと感じた。また同時に、普段の会話では「いつも何を食べているの?」というようなアバウト

な質問をすることが多いということに気がついた。“いつも”や“みんな”などのアバウトな言葉は便利であるけれど、本当に事実だけを聞き出すことはできない。しかし、“いつも”ではなくて、“今日は？昨日は？その前は？”というように、何度かに分けて同じことを聞くという工夫一つで事実を聞き出すことができるというのが印象に残った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今までは国際協力をする立場として現地の人々の力になるために様々な支援を“してあげられるようになりたい”という考えでいたけれど、開発支援をする立場の人々は、現地の人々と対等な関係・視点に立ち、互いを尊重し合う姿勢でいることが必要だと感じた。途上国の人々の暮らしは私たちからすると貧しかったり、効率が悪かったりするのかもしれないけれど、その人たちなりに一生懸命生きているし、現地で生きてきたからこそある知恵なども持っていると思う。また、先進国にはない“豊かさ”や学べることがたくさんあるだろう。何より、支援する側が上からの姿勢で、同じ立場に立っていないと現地の人々は本音を言ってくれなかったり、心を開いて接してくれなかったりと、良好な関係が築けず、本当に必要としている援助をすることができないまま時間と資金を無駄にしていまいそうだ。

現地の人々を尊重し、そこから何かしら学び取ろうという意識を持つことで、途上国の人々と対等な関係になるだけでなく、自分自身も成長していけたらいいな、と考えた。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回、インタビュー調査で事実を聞き出す方法を知り、実践してみて、この方法を現地の調査に取り入れるためには何度も練習し、慣れておく必要があると感じた。また、質問内容だけでなく、現地の人々のことを知り、聞きたいこと、知りたいことをはっきりさせて行きたいと思う。

木下 美咲

奈良女子大学 生活環境学部情報環境学科生活環境通信科学コース 2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

講義では前川さんが実際に途上国で体験したことを聞くことができ、とても勉強になった。最初からうまく行っていたわけではなく、日々の積み重ねでこの『対話型ファシリテーション』が完成したのだと感じた。また、そのことに加えて日常に落ちているちょっとした出来事がきっかけになるのだということが印象的であった。例えば、最初に『対話型ファシリテーション』が生まれたのが村人との何気ない会話だということには驚かされた。そして、私も日常の中に存在するきっかけに気付くことができるように常にアンテナを張るべきだと感じた。

グループワークや討論を通して感じたこと・印象に残ったこと

私がグループワークを通して最も印象に残ったのは実際に質問を行うことで『対話型ファシリテーション』を学べたことである。講義で話を聞いている時は質問を答えやすい簡単なもの、例えば Yes か No で答えることのできる質問にすればよいただけだと思っていたので実際に質問してみてもその難しさに驚いた。こちらは一方的に質問をしなければならず、また適当に質問を投げかけるのではなく、今、自分が何のためにこの人に質問しているのか、質問できる時間は無限ではないので、自分が必要としている情報をできるだけ早く得るためにはどのような質問が効果的かということを手では意識しながら質問を行わなければならないのである。話を聞くだけでは実際に体験してみると得ることができることもあるということも同時に学べ、とても印象に残った。また、たくさんの人数で話す事で今まで自分が持っていなかった視点を得られると感じた。一枚の絵からテーマを決め、考えるというグループワークではある問題点が出て、テーマが異なるにも関わらず同じ問題点が他のグループでも出ていることに興味深いと感じた。さらに、問題点に対する解決策もグループによってさまざまにそれぞれに良さがあると感じたので、答えは一つではないということも感じさせられた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

当たり前のことであるが、国際協力の場において使用される言語は日本語であることは皆無である。今回慣れ親しんだ日本語で質問を行い、討論したがそれですら言葉で伝えることが難しいと感じ、どのように伝えたと伝わるのかと試行錯誤した。そして、もし日本語以外の言語、例えば英語などで質問を行うとすると、日本語をそのまま言葉にするだけでは確実に伝わらない上に自分が意図している質問への答えを得るのは難しそうだと感じた。しかし、今回学んだ質問の方法であれば、Yes/Noで答えることができ、事実をしっかりと認識して得られると感じた。また前川さんの講義を通じて途上国の人々が必要だと言っているものが本当に必要なものとは限らないということに驚かされ、自分が今まで思っていた国際協力と実際の国際協力にはもっといろいろな違いがあるのではと感じた。

篠木 佐和子

お茶の水女子大学 文教育学部 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

「魚をあげるのではなく魚の捕り方を教える」という言葉が印象的だった。発展途上国の人々は受動的で支援をしてくれる相手に依存的なイメージがあったが、今回前川さんのお話を聞いてそのようなイメージは間違っていることを知った。漠然としたことを質問し相手に考えさせるのではなく事実を聞くことにより、正確な情報を得ることができ、それに基づいた持続的な支援が

行えるのだとわかった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

最初に行った「相手に5分間一方的に質問をする」ということが想像以上に難しかった。脈絡なく自分の聞きたいことだけを聞いてしまい、あまり話を広げたり、相手が話したいことを語ってもらい本音を話してもらい、などということができなかった。しかし、本音を話してもらいコツとして感情や考えを聞くのではなく、事実を思い出してもらいのが重要、ということを実感出来たので良かったと思う。発展途上国の人々の写真を見て実際に質問の内容を考える、という課題では、その人の持ち物や行っていることをもとに質問を考えた。建設的な会話をしつつ相手から事実を話してもらいえるようにするというのは難しかったが、現地での対話型ファシリテーションの練習になったと思う。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

一方的に支援を行うのではなく、今現在相手が何をしていて、本当に必要としていることは何なのかを知ることが重要だと感じた。支援してあげる人・してもらい人という立場ではなく、地域の人々に寄り添い、お互いが対等な目線に立って話し合うことで、初めて本当に彼らには何が必要なのかがわかるのだと思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

今までは何かを調査する際に、本やインターネットなどを資料として用いてきたが、今回はネパールを訪れて実際に現地の人々と対話する機会が得られるので、この「対話型ファシリテーション」の講義で得た知識を活用して質問などを積極的にしていきたいと思った。ただ自分の聞きたい質問ばかりを聞かず、相手の立場に立って交流を深めていきたい。

今西 凜花

お茶の水女子大学 生活科学部心理学科 1年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

メタファシリテーションで求められる「事実質問」を学ぶにあたり、事実とは何かを学んだ。「いつも朝ごはんは何を食べていますか。」という質問と、「今朝、朝ごはんは何を食べましたか。」という質問は本質が異なる、という説明にはっとした。前者はその人の主観が入る「考え・認識」を、後者は誰から見ても変わらない「事実」を問うているのである。私は今まで他者に聞き取りをする際、全体の傾向が知りたくて前者のような質問をしてしまっていた。しかし、そのような質問では「歪められた真実」しか知ることができないのだ、ということを実感した。

「なぜ」をつけた質問も考えや認識を問うものだということも学んだ。私は、以前別の理由で「なぜ」質問は避けた方が良く聞いたことがあったが、日常生活の中で多用してしまっていた。そのため、「なぜ」という言葉なしで聞き取りをすることは難しいのではないかな、と思ってしまっていたが、今回練習で行ったペアワークでは思ったよりも上手く事実質問を活用することができた。今後の日常生活でも事実質問を使うことを意識していきたい。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークではある一枚の写真をもとに、写真に写っている人物に聞き取りをすることを想定してグループで質問を考えた。グループでの討論や全体の発表を通して、客観性のある質問をすることが想像以上に難しいことを感じた。特に国際協力の方に身をおくと聞き手の文化と現地の文化が異なるので、同じ言葉でもそれぞれ定義が異なったり、両者の間で程度の感覚（「近い」と「遠い」など）が異なったりする可能性があることを感じた。

また、私のグループにいた留学生の方が、「日本人の感覚だと制服を持っていないということは制服を買えるほどのお金がない、と考えるかもしれないけれど、私の学校では制服を着るか着ないかは自由だし、制服を持っていないのは単に好みに合わないだけかもしれないよ。」と言っていたことも印象的であった。このことから、私自身が考えている前提とは異なる考え方、行動をする人がいるということを頭に入れて対話するべきだということを学ぶことができた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

講義の中でも、「現地の方々は、大学生がインタビューをしに来た、というだけでも自分が下だと思ってしまう」という説明があり、支援者や来訪者が現地の方々を軽蔑している気持ちが無くても、現地の方々が既に上下関係を感じて心の距離を置いてしまっている可能性があるのだと知り驚いた。このような関係の中では対等な視点を心がけるというファシリテーションの作法の他に、事実質問によるメタファシリテーションをすることに意義があると感じた。私は来月、実習としてネパールにて調査を行うが、現地の方々と対面したとき私はお話を聞かせて「もらう」側となるため、リスペクトの姿勢と同時に事実質問型の会話を心がけたい。

今後の学習や研究に向けた抱負

まずは、来月にネパールにて実習を行うので、現地での調査でメタファシリテーションの手法を十分に生かしたい。

また、私は心理学科に所属しており、今後カウンセリング法のようなスキルを学ぶときにも、事実質問に基づいたメタファシリテーションを心に留めたいと思う。途上国の住民に聞き取りをすることと同様に、相談をする人と対面した時にも、「どうしたい？」「なぜそうなってしまったのか？」という考えや認識を促す質問ではなく、経験を振り返り「思い出させる」質問が相談者の自己肯定感の向上に有効なのかもしれない、と考えている。

大谷 理香

お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

私は現在発展途上国での持続可能な開発に興味を持っており、将来は国際協力分野に携わりたいと考えているので、今回途上国の人々との話し方について NPO 法人ムラのミライの前川香子さんに途上国での豊富な実地経験に基づいたお話を伺えたのは大変貴重な経験になった。特に講義の中では「メタファシリテーション（対話型ファシリテーション）の素が生まれた時」という過去の様々な失敗談から新たな対話方法が生み出された過程が心に残った。大学で国際協力分野を学ぶようになって、「支援慣れ」という言葉を良く聞くようになったが、ムラのミライが経験してきた様々な失敗はまさにそれを象徴するような内容だった。「植林がしたい」という声からマンゴーの苗木を住民に配布し、「現金収入がほしい」という声から雌雄のヤギ飼育を導入し、「文字の読み方が分からない」という声から識字教育を始めた。一見すると国際協力の理想型のように思えるが、マンゴーは枯れ、現金収入はたいして増えず、読み書きができる人が少し増えたからといって貧困が目に見える形で削減するわけでもないという。その背景は住民の「支援慣れ」にある。支援側が何をしてくれるのだろうかと期待してしまう。そのような中で前川さんがおっしゃった「魚を“あげる”のではなく“捕り方”を教える」という言葉は非常に印象的であった。支援側と被支援側とが依存関係に陥らないために何ができるのか—そのようにして生み出された事実質問は画期的なものだと思う。援助側から新たな企画を提案するのではなく、「あなたは今何をしているのですか？」といったシンプルな質問によって、被支援者としてではなく、一人の住民としての本当の姿が見えてくるのだ。事実質問は、開発援助をより効果的・持続的な形で促進させるのに有効な手段の一つである。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

相手の本音や経験を語ってもらうために、やはり事実質問は欠かせないものだと言ったグループワークを通じて実感した。「いつも」という言葉は曖昧なもので、週に何回、月に何回で「いつも」になるのかという基準は人によって異なるため、聞き手と話し手との間に齟齬が生じてしまう。また、「なぜ？」と聞くと、良くない結果が生じている際には外部要因に責任を転嫁させ、良い結果が生じている際には内部要因を主張したがるし、「どうでしょう？」と聞くと、それは相手の考えを聞くことになる。そうしたNGワードを避けながら、一枚の写真を見て、いつ、誰が、どこで、どうした…と大量に質問を絞り出していくのはなかなか簡単な作業ではなかった。しかし、相手も事実質問から記憶を思い出していくため、実際に現地では聞かなくてもこのような質問に対し答えてくれるという。私はね、その日ね…と勝手に喋り出してくれるのだ。逆に言うとそのような勝手に喋り出すという状況を作り出すために、事実質問によって記憶のスイッチを押すことが必要なのである。

事実質問の作り方、対話型ファシリテーションをいかに進めていくかを一日で学ぶのは大変で

あったが、一日の中で事実質問の質が個人として、グループ全体としても向上したように思えた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

グローバル化が進む昨今、発展途上国を含む海外との人・モノ・カネの移動は一昔前に比べより活発になっている。そして学生の中には、「時間に余裕がある学生の中に、自分の価値観を磨くために国際協力に携わりたい」という人が多くいる。もちろん国際協力に携わる上で自らの価値観は大きく変わるだろうとは思いますが、決して自己満足に陥ってはならないと私は考える。個人にせよ団体にせよ、国際協力は誰かの人生に関わっていく活動だからだ。これは国際協力のみならず、他の世界でも通じることであるが、特に開発援助の現場では、社会的に弱い立場に置かれた人々がいるからこそ、結果を残すことが求められるのである。その結果は自己満足ではなく、被支援者の生活をより良い方向に導くものである必要があるのではないだろうか。そして結果を残すために、現場の声に耳を傾けることは不可欠である。そうした点で今回学んだ対話型ファシリテーションは非常に有効な手段の一つとなるだろう。私も9月にはカンボジアでのスタディツアーに参加し、様々な人に聞き取り調査をする予定だ。その際には、今回学んだ対話型ファシリテーションを活用し、相手に寄り添いながら、現場の声に真摯に耳を傾けたいと思う。

佐久間 実季

奈良女子大学 生活環境学部住環境学科2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

メタファシリテーションの素が生まれた時のお話が一番印象に残りました。土地なしの貧しい農民だと思っていたガンガイヤさんは、よくよく話を聞いてみると（事実質問をしてみると）、実は小さいけれど自分の畑を持っていて、その植物の育て方も知っていました。彼は誰かに支援してもらうために嘘をついていたのだと思いました。しかし具体例で自分に置き換えて考えてみると、微妙な聞き手のニュアンスの違いで全く違う返答になると分かりました。返答は全て本当のことで、嘘をついているわけではありません。聞き手の聞き方一つでこんなに返答が変わるとは意識したことがありませんでした。現実を構成する3つの要素（1.感情、2.考え、3.事実）から事実だけを取り出すことの難しさを感じました。ましてや支援する側と支援される側という立場がどうしても出来てしまう発展途上国の人との会話では事実を話すということがより大変で、大切なものになると思いました。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは、「これは何ですか？」という質問を入り口にして事実質問を考えていきました。私達の班では子供たちから家庭の話を聞くことを目的とすることとしました。家庭のこ

とを聞いていくときに困ったことは“家庭”と“頻度”についてです。家族の考え方が私達とは違うのではないかという疑問から、家族をどこまで含めるのか、そもそも小さい子にどこまで分かるのか、という話になりました。最終的には、「家族は何人いるの?」「それは誰?」「昨日は誰と一緒にご飯を食べたの?」と事実質問を重ねることにしました。今までなら「何人家族なの?」という一言で終わらせたいた質問が、相手の環境を考えることによって、こんなに質問を重ねることになるというのが驚きでした。また、頻度の聞き方についても困りました。“いつも”や“どれくらい”という言葉を使えば簡単ですが、それだと事実質問でない、どこか漠然とした質問になってしまいます。その時は結局どう聞けば良いのか分かりませんでしたが、他の班の話を聞いて解決方法の一つが分かりました。他の班では、ある洋服を着る頻度を知るために「同じような服を何着持っていますか?」や「その服を着ない日はありますか?」という聞き方をしていてとても上手だと思いました。何着持っているかという変わることはない数字を聞き、加えて逆に着ない時を聞くという発想が、頻度を聞くのに役立つと思いました。始めは、聞き方をちょっと変えるだけで、簡単だろうと思っていましたが、思った以上に難しいと感じました。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今まで国際協力や地域開発活動について考える中で、話し方に重点を置いたことはありませんでした。ですが、今回参加するにあたり、話し方一つで相手の反応や返答が全く異なり、それによって現地でもできることも全く変わってくると分かりました。砂漠に井戸を作ったとしても、目先の利益のためにすぐに壊して部品を売ってしまうという話を聞いたことがありました。その話に対して私は、考え方が違うからもうどうしようもないと思っていました。しかし、援助する側にも問題があるのではとこの講義を通して思い始めました。もっと事実を聞くようにメタファシリテーションを行ったりしていたら、違った支援を行ったり違う結果が生まれていたのかもしれないと思いました。私は発展途上国に行ったことがないので、実際は言うより難しいことだと思います。でも、これから国際ボランティアに行く機会があったら、メタファシリテーションを通じて物事を見るという視点を大切にしていきたいと思います。

藤田 有香

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 4年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

「なぜ」「どうですか」という定番の質問フレーズを禁止する理由に納得した。本当に知りたい情報を共有できるコミュニケーションの秘訣であると思った。「なぜ」「どうですか」という漠然とした問いかけは、「なぜそう思いますか?」という言い方に変換できることから分かるように、答えに回答者の考えや主観が入る。それが回答者の思い込みや言い訳になると、事実が

更に見えにくくなる。これは遅刻した人が交通機関に責任転嫁する例を通して理解が深まった。途上国の住民への聞き取りのように、事実を知ることが目的のコミュニケーションにおいては、人間の心理や記憶の不明瞭性を理解した土台がないと、ちょっとした不一致が問題を生じさせ、結果的に相手を責めたり不信したりしてしまう要因に繋がりがねない。メタファシリテーションは、単に途上国におけるコミュニケーション力の向上だけでなく、どんな場所でも人間同士の深い理解に貢献する可能性があると考えている。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

実際に事実質問を作る作業は、思ったより難しかったというのが率直な感想である。なぜならその質問を通して予め立てたテーマの内容を把握するという目的があるために、思いつきではなく、一貫した目的観をもって進んでいく必要があるからだ。それを前川さんの言葉で言うと、「暮らしや伝統というのは、具体的なものの積み重ね」なのである。外部の私たちはそれを把握するために、事実質問を通して「住民の記憶のスイッチを押し」、暮らしや伝統といった見えないうもののごく一部を、住民の記憶を通してすこしずつ浮かび上がらせていく。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動というのは、目の前の一人と話すことの延長線上に位置付けられるのだと思った。たとえ国や言語、文化が違っても、国際協力とは人と人が向き合うことでありまたそこを土台としてとらえていく心構えがなければならないと感じた。

今後の学習や研究に向けた抱負

メタファシリテーションを実践していくためには、学んただけでは活かせる基礎がないので、日常生活の中で練習し、実習ではメタファシリテーションを利用してコミュニケーションを取れるように心がける。

横山 円香

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

メタファシリテーションの意味と意義、作法を学んだ。メタファシリテーションとは、事実質問のみを行い、共通の認識を得て次のステップを考えていく手法だ。質問を受ける側が、自らの過去や経験や今ある資源を思い出すことで、自分に自信をもって対話をしてくれるようになることが、この手法の意義である。フィールドワークの作法としては、目に見えているもの・前に話していた内容・相手の良い変化から話を始めること、良いところを探すこと、切り上げる時間を

守ること、相手と同じ目線にすること、ダメだしを我慢すること、などを学んだ。これらは、私が現在受講している学校カウンセリングでの、生徒との面談の作法と共通している。すべての対話において、相手の気持ちを想像し、対等な関係を構築するよう努めることが不可欠だと再認識した。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークを通じて、質問を厳選することの重要性を感じた。データでわかること、過去のフィールド調査ですでに分かっていること、相手が答えられないと推測されることはインタビューしない。適切な質問を見極めるためには、丁寧な事前学習が不可欠だと感じた。2度の討論での変化から、抽象的な問いも視点を変えることで事実質問にすることが多いとわかった。具体的なコツとしては、過去時制で行う、一般論ではなく目の前の相手に焦点を当てる対象の一部だけを取り出して具体的に聞く、などである。

国際協力や地域開発活動について考えたこと、今後の学習や研究に向けた抱負

協力、援助、貢献は主語が異なる。「協力：ある目的に向かって力を合わせる。援助：たすけること。貢献：物事や社会に力を尽くして、よい結果をもたらすこと。寄与。＜weblio 辞典 <https://www.weblio.jp/> より＞』その中でムラのミライを作る動詞は協力である。国際協力は、途上国に迎え入れていただく私達が、現地のことを学ばせていただくことから始まる。現地の方と対話する際には、無意識のうちに援助をする側であるといった錯覚を持ってしまう危険性があることを自覚し、協力してくださる方々への敬意と感謝を忘れず、事実質問を使って現状を把握するメタファシリテーションを実践すべきだ。そのために、今後、NGワードを意識して自問自答をする練習を、日本語・英語で行っていく。

ムラのミライの成功体験だけでなく失敗体験や葛藤を踏まえたお話・前川さん自身のユーモアに溢れた体験談・グループワークを通じて、現地でメタファシリテーションを具体的に想像し対話や国際協力の難しさ・楽しさを感じた。今後色々なことに挑戦し、前川さんのように謙虚で優しい社会人になりたい。

大城 麻菜

お茶の水女子大学 文教育学部人間社会学科 1年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義では、前川さんの途上国での経験を踏まえながら、「対話型ファシリテーション」について学んでいった。そこでまず印象に残ったのは、途上国支援をするときに、物を与えるのではなく、また何かの方法を教えるのでもなく、現地にある資源や人々の経験を活かすことが大

事であるということだ。私は今まで、途上国が問題を抱えているのは、資源の不足や制度の不十分さにあると考えていた。しかし、支援する側から見ると不足や不十分に感じられる状況でも、現地の人々は現時点で何とかやりくりが出来ていたり、特に問題を抱えていなかった過去があったりする。支援の際に注目すべきところは、このような実際にある・あった状況などの事実だ。これらを活かすことで、現地の人々にとって、有効的かつ持続可能な支援ができると知った。

そして、支援の種となる事実を聞き出していく方法に「事実質問」がある。現実を構成する要素として、感情、考え・認識、事実があるが、対話型ファシリテーションでは事実質問で聞き出した事実に焦点が当てられる。実際に事実質問を受けて、相手からの質問にすらすらと答えることが出来た。また、自分の事実のみを聞かれているため、相手の気持ちを深く考えながら話す必要がないという点でも精神的な面で楽だった。途上国支援の際に事実質問が使われるメリットはこのようなこと以外に、支援する・される人々が対等な関係を構築していくことに繋がること、支援される人々が自分たちの経験・資源を思い出すことで、自己肯定感の向上につながることで、そして、このような流れから支援における依存関係が壊されていくことが挙げられる。対話型ファシリテーションから生み出される支援が有効的かつ持続可能であるのは、事実から生み出されることで支援自体の実現性が高いということの前に、事実質問の段階で、支援される側の人々との関係づくりがしっかりとされていることや、生活向上への原動力となる自信などを高めていくことが前提にあると感じた。対話型ファシリテーションが、私がもともと支援と考えていた、ものを与えたり方法を教えたりする支援と大きく異なるのは、このように精神的な部分も考慮されているところにあると思った。

今回の講義を通して、対話型ファシリテーションとは、支援する・される人々で対等な関係を作っていくたり、支援される人々の自己肯定感を高めていくたりするなど、精神的な部分を考慮しながら、支援される人々の現地の人々が持っている資源や経験などの事実をもとに支援を組み立てていくことであると感じた。また、対話型ファシリテーションは、途上国に限らず、どこであっても有効的な支援を生み出していく方法として役に立つものだ。ぜひこの技法を身につけて支援を考える多様な場面で活かしていきたい。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークで途上国の写真から事実質問を考え、事実質問の難しさを実感した。まず、「よく」「みんな」「どうして」を使わずに自分が聞き出したいことを探っていくところ、「役割分担」「日々」などの定義が明確でない言葉に気づき、省いていくところ、前に質問と関連付けて質問を繋いでいくところに、主に難しさを感じた。事実質問を考えてみることで、「よく」「どうして」や定義があいまいな言葉などの事実質問では使えない言葉の省き方を知ることができた。また、冷静な視点で質問を見てみることで、途上国の人に対して失礼であったり、答えにくかったりする質問をしていないかということを、じっくり考えることができた。さらに、事実質問を組み立てていく中で、どこのグループでも、漠然としたテーマが絞られていき、より具体的なものになっていった。これにより、自分が本当に知りたいと思っている内容や必要な情報が

明確になり、質問が組み立てやすくなっていった。

実際の活動や討論の中で、私が感じた事実質問の組み立て方のコツは、目から入ってくる情報や相手の言葉に敏感になることで、テーマに様々な面からアプローチしていくこと、事実質問で使ってはいけないような言葉を省きながら質問を構成するのが難しい場合は、シンプルな質問を多く組み合わせていくこと、相手の身に着けているものや生活様式について、当たり前だと考えたり、特に意味のないものだろうと推測したりせずに着目していくこと、テーマを具体的なものに絞ることだ。そのほかにも、複数の人がいるとしたら、質問をどの年代、性別、見た目の人にすつのかを特定しておくことも重要であると思った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発を考える際に、「先進国の技術や制度をどのように生かすか」ということではなく、「途上国に今あるものや過去にあったものをどう生かしていくか」という視点をもつことができた。

先進国と途上国の人々に対して支援をするのは、先進国が優れているからということでは決してない。先進国の人々が途上国の支援・開発をする意味は、途上国の人々とは全く異なる背景をもっていることを活かして、現状をより客観的に分析したり、また、一人の人として、新しい考えを生み出したりすることにあると考えるようになった。

また、国際協力や地域開発というと、国際機関や団体などが活躍していたり、個人でボランティアとして、現地の人と同じことをしていたりするというイメージが強かった。しかし、「途上国に今あるものや過去にあったものを活かしていく」という視点から国際協力や地域開発活動をしていくと、個人でも十分に途上国の人々の生活を変えていくことが可能であることを知った。

今後の学習や研究に向けた抱負

今回の講座で、現地にあるものを活かす方法や考え方を知ることが出来たと同時に、国際開発や地域開発についての視野を広げることができた。今年の9月に参加予定のカンボジアでのスタディツアーでは、事前準備を十分にしておき、また事実質問を上手に使うことで現地の実態を自分なりに分析できるようにしたい。また、国際協力や地域開発を考える上で、途上国の実態や支援方法などを知っていることだけが重要なのではなく、途上国のことに限らず、広い視野や柔軟な考えを持っていることが大事であると考えた。今後の学習では、国内外、分野を問わず関心を広げ、そのような知識や考えを持った上で、途上国をみていきたい。

中島 百花

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 2 年

議論を通して学んだこと・印象に残ったこと

「事実質問」の重要性について学んだ。朝ごはんについての質問を3種類した際に、それぞれ得られる回答が異なっていて興味深かった。「なぜ?」「どうして?」の質問は普段何気なく使っていたが、これから導かれるのは言い訳であることを知った。スタディツアーではいろいろな方にインタビューする機会があると思うが、その時は事実・ホンネを聞かせていただくためにその方の経験を思い出させるような質問を作り、対等な関係でインタビューできるように心がけたいと思った。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークは自分にとりとてもいい経験になった。自分の意見に賛成してくれたり、自分では考えていなかった答えが知れたり、一人では経験できないことができた。最初は相手に事実質問を使って質問を5分間行った。相手に質問をするだけだと思っていたが、事実を聞き出すために「なぜ?」、「どうして?」を使わずに質問を工夫しなければならなかったので苦戦した。これから相手に質問しても自分の質問によっては事実を引き出せないことがあること、また相手から事実・ホンネを聞き出す大変さを実感した。次に一枚の写真からひとつテーマを決めてそのテーマに沿った回答を得るためにはどのような順を追って質問していったらいいか考えた。私たちのグループでは“女子の暮らし”をテーマに質問を考えていったが、最初はいいい質問が浮かばず、つまづいてしまった。しかし、最後の発表では写真を着目する点を変えることによって女子のある一日の暮らしが見えてくるような質問を何問も考えることが出来た。ひとつ着目する点を変えることで、今までとは違うことが見えてきたので、何かひとつのものに集中せず、広い視野を持って考えることがインタビュアーにとって欠かせないことだと思った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

私は国際協力や地域開発活動にとって最も重要なことは相手と対等な関係を築くことだと考える。前川さんも対等な関係を築くことで信頼を得られ、相手のホンネが聞き出せるとおっしゃっていたので、スタディツアーに行く時は、まずインタビューさせていただく方と対等な立場に立ち、信頼関係が築けるように励みたいと思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は今年の夏休みにスタディツアーでカンボジアに現地調査をしに行く。私は「教育」と「子どもの暮らし」について興味があるので現地に行き、生の声を聞いて、実りある調査をできるように、発展途上国に行くのは初めてでインタビューするのも初めてだが、今回のセミナーで学んだことを活かし、少しでも現地の方々の力になれるように頑張りたいと思っている。

西岡 さくら

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科人間発達学専攻D2年

議論を通して学んだこと・印象に残ったこと

- ・援助マジックの話が印象的であった。援助する側、される側の立場の垣根を崩すような立ち居振る舞いがメタファシリテーションの前提にあるが、安西それが実態をみるとできていないとのこと。経験を重ねれば身につくことでもないので、援助者側の人材育成の重要性を認識。
- ・メタファシリテーションの手法は、日々の生活（特に人間関係構築において）でも有用であること。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

- ・メタファシリテーションの手法を有効に使うためには、外国人である支援者が直接インタビューするより、対象コミュニティに近い現地の人を介してインタビューする方が有効か。
- ・同じグループになった学部生たちは途上国や外国での活動に対して、憧れのようなものをもって、目標に向かって実直に知識を吸収しようとしている姿に刺激を受けた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

- ・支援を受ける側が自立してプロジェクトのPDCAをまわし、支援者側が適宜サポートする方法には効果があるとのこと。このやり方の核には「オーナーシップの尊重」があり、考え方としては理解できる。しかし、プロジェクト毎に規模、期間、マンパワー（支援者、被支援者側の双方）が異なるため、このアプローチがすべてのプロジェクトに対して効果があるかは慎重な検討が必要であろう。また、オーナーシップを「どの程度まで」尊重するべきか、支援者側がどのように判断するのか、今後学習したい。

今後の学習や研究に向けた抱負

- ・現地インタビューの準備にあたり、今回のワークショップで行ったように、事前に質問を想定→可視化（実際にチャートを書く）するシミュレーションを行いたい。
- ・途上国といっても、国、地域毎に文化・習慣が異なるため。自分が調査する地域について可能な限り多くの知識を持った上で調査に臨みたい。

本多 優希奈

奈良女子大学 理学部化学生物環境学科生物科学コース 1 年

議論を通して学んだこと・印象に残ったこと

私が一番印象に残ったのは「なぜ」「どうして」という質問をするべきでないということである。どちらも人を責めてしまう質問であったり、言い訳を言わせてしまったり、その人の考えを聞き出してしまうことになるからだ。これらは事実質問としては適していないということである。これら以外にも「普段」や「みんな」といった、曖昧な表現は事実質問において適切ではない。事実質問を繰り返すことによって、本当の問題であったり、問題の本当の事実の部分であったり人を人の考えや感情なしに取り出すことができる。私はこの話を聞いて、すごく納得をした。確かに、相手に意見を聞くと、本当の問題は見えてこないし、それはあくまでもそれぞれの価値観になってしまうので、全然客観視することができない。何かの大きな事業であったり、解決策であったりはこのような人の感情の入っていないプロセスを経て、成すことができるのだろう。しかし同時に疑問も抱いた。なぜなら科学者は常に疑問を持つことが大切であると教わっているからである。「なぜ」を大切にする。「大切なことは、何も疑問を持たない状態に陥らないことである。」そうアインシュタインも名言として残している。しかし同時に解決もした。これは人に問うのではなく、事実问到いているからである。今回の話は対話における事実質問であり、このこととは関係がない。しかし科学者であっても実験を進める過程でこれらのことは活かせるのではないかと思った。例えば、ある疑問が浮かんで、それに対して「何をした時に浮かんだ疑問だったのか」と事実質問を重ねる事でその問題の本質に触れることができる。その他にも勉強をするときに例えば悪い点数をとって「今回のテストはどの部分で一番点数が取れていなかったのだろう」「そのテストの前後に自分は何をしていたのだろう」とその原因を探ることができ、改善をすることができる。このように事実質問は対話のみでなく、様々な事柄に応用できるのではないかと思った。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

まず事実質問を自分のペアの人に対してした時に、いかにそれが難しいことなのかを実感した。事実についての質問であるので、常に言葉には気をつけていなければならず、なかなか会話を弾ませるのに苦労した。しかし反対に自分が事実質問されるとすごく話しやすかった。自分の答えが明確であるからだ。ここから「事実質問」は「相手を思いやる」ものであることを実感した。「なぜ」「どうして」と聞かれるよりも、事実について聞かれた方が答えることは明確で、自信を持って発言できる。またその自信でその他の自分の話についても自信が持てる。また反対に事実質問をする側はその分だけ負担がかかってしまう。これも慣れてしまえば、大丈夫なのかもしれないが、慣れないうちは相手の負担を自分が背負うことになり、いかに大変なことであるのかを学んだ。またグループ討論ではお互いに意見を言い合う中で、事実質問を繰り返すと具体的な話に繋がることを知った。結局、解決策を導き出すためには、具体的なことまで知らないといけ

ないということである。そしてその具体的なことまで知ること、初めて問題の核に触れることができるのだと知った。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動において「対等な立場」ということが大切であることがわかった。援助をする側と援助をされる側とではどうしても優劣関係が生まれてしまうものだが、対等な目線で話し合わなければ、問題の本質に触れることさえもできないし、信頼すらも生まれないのである。また講義の中で「事実質問をしても相手が事実を話してくれるとは限らない」とあり、やはり信頼関係は大切であると思った。そのためにはまず相手と同じ目線に立って話し、相手の良いところやそれに繋がるような周囲にあるものを探す。そして相手に自信を持たせるように、肯定的な感情を持たせるような質問をするということが大切である。そうすることで現在抱えている様々な問題を、少しずつ互いに本当の意味で協力して解決することができるのだと思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

前述したように「事実質問」を会話の中だけでなく、勉強面においても利用していきたいと思う。具体的には私は理学部に所属しており、これから自分の疑問を研究する場面があるので、そこで今回の学びを利用したい。また、自分がボランティアに行った時、今回のこの学びを活かして、現地の人と関わりたいと思う。その他にも、新しい友達と話す時、また友達の相談に乗る時相手が話しやすいように今回の学びを利用したい。

今村 咲稀

奈良女子大学 理学部化学生物環境学科生物科学コース 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

発展途上国の人々の暮らしは日本のような先進国とは違っていると思うが、どちらの国でも、人々は自立して生活を送ることができているんだと感じた。また、途上国へ国際協力として私達のような先進国の人々が訪れたとしても、途上国の人々はそう簡単に真実を教えてくれないということも、確かにそうだと改めて気づいた（私自身も初めて会った人にアルバイトのお給料のことなどを聞かれたら不快に感じると思う）。

フィールドワークで大切なことは、“本音をリアルに話してもらおう”ことで、自分から感情や考えについては聞かず、その人に対してしゃべりたいという気持ちを掻き立たせるような質問をすることだということが分かった。その人の経験話を話してもらって、その人に自己肯定感をもってもらうような質問をすることも大切だと思った。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

「自分が質問されてどんな気持ちになるか」を質問する前に考えることが大切だということが分かった。

“なぜ”、“どうして”をつかわずに、事実質問をすることはとても難しいと感じた。

相手の答えから自分が知りたいトピックに関連させていくことの大切さを知った。。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

途上国の人々への支援は、私達が考えてやることではなく、実際にその村や町の人々のリアルな話を聞いて、本当に必要なものを支援することが大切だと考えた。

魚を与えるのではなく、魚を捕る方法を教える。しかし、“魚を捕る方法を教える”ことは途上国のその村や町の人々にとって必要なのかを見極めること。

今後の学習や研究に向けた抱負

現地の人々に対して抵抗をあまり与えず、その人々の本当の生活を知ることの難しさをちょっとだけ理解することができた。私はフィールドワークなどの活動をしたことがないため、これから途上国でフィールドワークをするような機会があれば、今回の研修のことを思い出して取り組みたい。

佐久間 菜緒

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 2 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

講義を通じて、一見すると良いと思われるような支援でも失敗に終わることが多々あり、良い支援をするためには途上地域の状況を正しく把握する必要があると感じた。例えば、食糧を支給するのではなくて、魚の釣り方を教えたり効率の良い農作業の仕方を教えたりする支援のあり方は、途上地域の自立のためになる良い支援だと思われがちだが、実際には途上地域のニーズにあっていないこともあると知り、支援する側の価値観で何が良い支援なのかを判断してはいけなかった。だからといって、途上地域の方にどんな支援が欲しいかを聞いて、その通りに物や資金を提供しても、生活の向上につながらなかったり、支援する側の思ってもいなかった方法で提供した物が使われたりすることがあるので、途上地域の方のニーズを聞き出すのは難しいと実感した。途上地域のニーズを聞き出すには途上地域の現状を正しく把握する必要があり、そのためには事実質問を使って質問していくことが有効だということを学んだ。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

グループワークでは実際に途上地域の現状を知るための事実質問を組み立てた。私のグループでは、女性が身につけているものからその民族の文化を知ろうとした。文化を知することは、地域の文化を念頭に入れた支援をすることに繋がると思う。服装から話を始めるので、失礼にあたることはほばないと思うし、自分の民族に誇りをもっていたらこちらが多くのことを質問しなくても様々なことを話してくれると思うので、より本当のことが見えてくると思う。「なぜこの服を着ているのですか。」と質問するのではなく、「初めてこの服を着たのはいつでしたか。」や「初めてこの服を着た日は何をしたのですか。」といった質問を重ねることで民族衣装を着る意味を理解するというのとは一つのテクニックのように感じた。事実質問で聞きたいことを聞くことは難しいと感じることもあり、事実質問ではない質問をしてしまわないように気をつけなければいけないと感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力や地域開発活動において、支援する側とされる側の間に権力構造が生まれてはいけない。途上地域の方々にインタビューする時には、権力関係が生まれないように十分に注意しなければならないと思う。インタビューする側は自分たちが上だという意識をもっていなくても、インタビューされる側が相手の方が偉いという認識をする可能性が十分にあるから気をつける必要がある。知らない外国人がいきなり自分たちの生活について聞いてきたという状況は恐怖であってもおかしくないので、常に同じ目線で同等の立場だと伝える思いやりが必要だと思う。先進国の価値観ではなく、途上地域の価値観を尊重して必要に応じた支援をすることが求められていると思う。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は、夏休みにスタディツアーでカンボジアに行って、農村でインタビューなどもするので、その時に今回学んだことを生かしたい。国際協力は日本で語ったり議論したりするだけならいくらでも理想を追求できると思うが、実際に現地に行くとうまくいかないことが多いと思う。そんな時でも今回学んだ姿勢で現地の方と接して少しでも現状に近いものを吸収したい。

櫻井 那由加

お茶の水女子大学 文教育学部言語文化学科 2年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

対話型ファシリテーションは、事実質問を繰り返し、途上国の人々のリアルを引き出す手法であることがわかった。意識せずともできてしまう、援助者と被援助者という地位的な差を感じさ

せないように、視線を合わせて、答えやすい事実質問をすることで、途上国の人々の自己肯定感を上げて、インタビューする。それによって、対等な関係を築き、会話・対話を楽しめるようになるため、インタビューの内容が濃くなり、たくさん話してくれるようになるということがわかった。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

実際に、「これは何ですか？」から会話を初めて、事実質問だけで5分間質問し続けるのは難しかったが、逆に自分が答える側に回ると、事実質問は答えやすく、会話が弾む感じがした。難しいけれど、相手に会話を楽しんで、いろいろ話してほしいので、事実質問ができるように練習したいと思った。グループワークでは、事実質問だと思っていた質問が事実質問ではないということが多く苦戦したこともあったが、「ここをこう変えたら事実質問にあたるのではないか」とたくさん議論ができて、いい経験になったと思う。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

国際協力を勉強していて、将来も国際協力関係の仕事をしてみたいと考えているので、現地調査や援助活動での現地の人々との会話の仕方で、引き出せる情報が異なり、それによって援助が成功するか失敗するかまで左右されることがあるということを知ることができて、ためになった。対話型ファシリテーションを用いた活動は、トップダウン形式の援助ではなく、ボトムアップ形式の援助、村の人々が中心になって、自分たちの生活について何が課題で何が必要なのかを考えてもらう援助の形式を手助けできる手法なので、これからの援助活動に必須だと思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

カンボジアでのスタディツアーに向けて、少しでも対話型ファシリテーションの手法を身につけて、よりよいインタビューが出来たらいいと思う。

田島 実のり

お茶の水女子大学 理学部生物学科 1年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

事実質問の大切さを前川さんが仰っていたことが印象に残った。特に朝ごはんの例は「いつも朝ごはんは何を食べますか？」と「今朝は朝ごはんは何を食べましたか？」の違いが明確に出ていて、いつもと昨日では答えが違うこともあるし、「いつも～？」という質問は事実の答えとは限らないことを知った。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

私は講義で事実質問の大切さを知ったと述べたが、グループワークでは事実質問の難しさを痛感した。グループワークでは以下のようなことをした。途上国で撮った様々な写真から一枚を選び、そこに写っている人々にインタビューをするという設定で各グループが決めたテーマに沿って事実質問を30個以上考える。私たちの班は現地の服装の文化について質問しようとなったが、質問を考えていくうちに何が事実質問で何が違うのかが分からなくなったりした。前川さんにもこの質問は事実質問かどうかを何度も確認したり、うまい聞き方を聞いたりした。班のメンバーや前川さんの力のおかげで事実質問を30個以上出すことはできたが、自分だけではとても思いつかないくらい難しかった。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

現地の人々は国際協力や地域開発活動で途上国に外国から来た人を格上だと思ってしまうことを知った。国際協力や地域開発活動で途上国に行くこと自体はとてもいいことだが、現地の人と対等な関係を作り上げないとそのプログラムはうまく行かないと思う。そこで今回学んだ事実質問が役に立つだろう。なぜなら事実質問は答えやすいために現地の人は何でも答えられるといった自信を持つことができるからだ。私も夏休みにはネパールへのスタディツアーがあるのでそこでより多くのことを学ぶために事実質問を大いに活用して現地の人と対話していきたい。

壇辻 ゆりか

奈良女子大学 理学部生物環境学科生物科学コース4年

発展途上国における国際協力というと、ボランティア活動や募金といった支援を行うイメージがあり、どうしても私たちがその国の人々を「手助けしてあげる」という考えになりがちである。しかし、ボランティア活動はどのように行われ、日本から発展途上国に行く方々は、現地の方々とどのように接しているのか、実際のところ、私は何も知らないということに気づいた。ボランティア活動を行っている方の生の経験談を聞くことで、私の凝り固まったイメージを改めることができ、私と同様の考え方を持つ人々に少しでも正しい見識を広めることができるのではないかと思います。今回の「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」のイベントに参加した。実際に話を聞いてみると、私が想像していたような「～してあげる」といった行為はなく、ボランティア活動で支援するにしても、現地の方々の考え方や発想、自立性を大切にされていることがわかり、私が誤ったイメージを抱いていたことを痛感した。中でも、印象に残ったのは、今回のメインテーマでもある「メタファシリテーション」という会話法だ。

メタファシリテーションが確立する以前、今回講演してくださった前川さんの所属するムラのミライでは、ボランティア活動を行う際、現地の人々にそこで生じている問題の原因および、こ

れからどうすればよいのかのアイデアを聞いて、それを実現させるのに必要な費用等を支援するということだった。解決するためのアイデアは現地の人が考えたものであるがゆえ、そのやり方は現地の人々に寄り添っているとても素晴らしいもののように思われた。しかし、実際は、そのアイデアは理想論であり、新たな問題が生じるなどして、成功することがほとんどないということであった。

この、原因は何か、どのようにしたら解決すると思うか、という「なぜ、どうしたら」の疑問で聞く会話方法こそが、実現不可能な解決先を作り出していたのである。悪い結果に対しては、天候や周りの人々、環境などの外部要因に誰しも原因を求めがちであり、現地の外部要因となる環境はそうそう変化しうるものではないのだから、いくら新しいアイデアを出してもその環境に応じたものでなければ、そのアイデアは実現できないのである。

この従来のやり方に対して、メタファシリテーションでは、事実、すなわち経験を聞くことに焦点が当てられる。これからどうするかではなく、これまでどのようにして問題と向き合ってきたかを聞くことこそ重要であり、それこそがそこで暮らす人々で見出してきた問題解決方法、つまり実現可能な問題解決策なのである。そして、この会話法によって引き出す問題解決策は、現地の人々の過去や経験を尊重するものであり、私のイメージしていた「～してあげる」という烏滸がましいボランティア活動とは正反対のものであった。

前川さんの具体性に富み、簡潔で分かりやすい説明のおかげで、メタファシリテーションを理解することはさほど難しいことではなかったが、いざ、メタファシリテーションを実践しようとすると、これが難しい。事実を聞くためのシンプルな質問がなかなか浮かび上がらないのだ。例えば、私たちのグループでは、1枚の写真を見て、そこに写っている人々から文化について聞き出すことを目的として疑問文作りを行った。事実を聞き出すには、相手の主観が入るような疑問文を作ってはいけない。しかし、「文化」というものが抽象的な概念であるがゆえ、できあがる疑問文も「民族服には何か意味があるのですか」「これを初めて着たときに何か儀式があったのですか」という概念を問うような疑問文ができあがり、事実質問と言われる事実のみを聞き出す疑問文が作れないのだ。

しかし、これらの疑問が前川さんの手にかかるにあつと言う間に事実質問に生まれ変わる。民族服の意味を問いたいのであれば、服を着ている日の上場に着目し、「それを初めて着たのはいつですか」「その日は誰と一緒にだったのですか」「その日は何をしたのですか」などと質問すればよいとのことだった。少しずつ情報を聞き出し、質問を重ねることで、例えば、初めて着たときの情景を詳細に思い描けるようになっていくのである。つまり、知りたいことを一つの質問で知ろうとするのではなく、一針一針縫っていくように、具体的で詳細な質問にたどり着くまで、素朴な質問を重ねていくことが大切なのである。

難しいながらも、質問を作成し、その改善点を教えて頂けたことで、講義終盤には、なんとか事実質問を出せるようになった。一度、事実質問の作り方のコツを掴めると、知りたいことに対して、時期に注目しようとか、他者と比べてみようとかいう具体的なものの見方で質問を考えることができ、事実質問を考えることが楽しくなった。

前川さんが仰っていたように、初めて会う人から質問をされるとどうしても緊張してしまうしそれが、支援を受ける側であれば、畏怖してしまうこともあるだろう。しかし、メタファシリテーションで使われる質問は事実・経験を問うため、必ず答えることのできる質問なのである。答えることができると、自信につながり、もっと答えたい、もっと話したいという気持ちになる。実際にペアを作ってメタファシリテーションをしてみたとき、私は、答えることが楽しく、相手にもっと私のことを知ってほしいという気持ちから、質問されてなくても自分から話すようになった。メタファシリテーションは相手を尊重しつつ相手のことを知ることのできる、人と人をつなぐのにつけていける会話法である。国際協力に限らず、コミュニケーションの一方法として、日々の生活で実践していきたい。

町田 早弥香

お茶の水女子大学 文教育学部人文科学科 1 年

講義を通して学んだこと・印象に残ったこと

今回の講義では実際に途上国支援の仕事をしている前川さんからお話を聞くことができ、国際協力に関心がある私にとってとても学ぶことが多かった。まず印象に残ったのが、前川さんが所属するNPO法人「ムラのミライ」の過去の失敗談だ。ムラのミライでは、活動を始めた当初は、「魚を与えるのではなく、魚の捕り方を教える」をモットーに活動していたが、なかなか現地の人々の暮らしを改善することができなかったそうだ。私は今まで、「魚の捕り方を教える」というように現地の人々に知識を与えて自分たちで生活を改善させていくやり方は支援のとても良い方法だと考えていたため、このような失敗談には驚いた。この話を聞いて考えを改めさせられたし、支援のためには現地の人々のリアルな姿を知り工夫をすることが大切なのだと感じた。また対話型ファシリテーションのやり方などについてのお話もとても興味深いものであった。最初に「対話型ファシリテーション」という言葉を聞いたときはどのようなものなのか、いまいちイメージが湧かなかったが、相手から事実を聞き出すコミュニケーションの取り方だと知り、何気ないコミュニケーションでもちょっとした工夫をすることで相手から違った情報を得られるのだと驚いた。事実質問をする際に「どうして」や「いつも」、「みんな」といった言葉を質問に含めてはいけないというのは少し難しいとも感じたが、逆にそれだけの工夫で相手の感情や主観が入らない答えを得られるというのはとても面白いと感じた。

グループワークや討論を通じて感じたこと・印象に残ったこと

ペアワークやグループワークで実際に事実質問をしてみて感じたのは、質問を事実質問にするために意識して相手に聞くのは意外と難しいということだった。まずペアワークで5分ほど事実質問を使って会話をしたとき、質問する側はどう質問するか意識していると詰まってしまうのかな

かうまく対話ができなかった。逆に答える側は自分で質問の答えを考える必要がなく、事実を答えるだけなのでやりやすいと感じた。次のグループワークでは写真を見て質問を考える形であったが、なかなかまい事実質問が思い浮かばずグループのメンバーと試行錯誤した。しかし後半では事実質問の仕方にも慣れてきて全員でいろいろな質問を考えることができた。グループワークではどうしたら相手から必要な答えを聞き出すことができるか、グループのメンバーと一緒にいろいろと考えることができ、とても良かったと思う。また、私たちは日本人だけで日本語で質問を考えたが、実際に途上国の人たちと対話をし、英語などの日本語でない言葉を用いるとなるとまた違った難しさがありそうだと感じた。

国際協力や地域開発活動について考えたこと

今回参加して、国際協力に関して考えたのは現地の人々とコミュニケーションなどを通してよい関係を築いていくことの大切さだ。ムラのミライの活動を最初に紹介してくれた時や対話型ファシリテーションを用いた現地でのコミュニケーションのお話をしてくださった時、ムラのミライで活動する人たちと現地に暮らす人たちの距離がとても近いように感じられ、そのような支援の在り方はとても良いものだと感じた。また、途上国に住む人たちとの関係において、支援する側が上の立場、支援される側が下の立場といった関係になってしまうのではなく、同じ人間として対等な立場で接することが大切だと思った。

今後の学習や研究に向けた抱負

私は9月にカンボジアの農村へ現地調査に行くため、今回様々なことを学ぶことができてとても良かったと思う。カンボジアでも実際に今回学んだ対話型ファシリテーションを参考にしてよい調査を行いたいと思う。

上田 由理佳

お茶の水女子大学 生活科学部卒業生

2019年7月6日（土）、NPO法人ムラのミライ海外事業チーフの前川香子氏を講師としてお招きし、大学間連携イベント「『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」が実施されました。当日は、2大学から22名の学生・社会人が参加しました。

対話型ファシリテーションは、事実のみを聞き出す質問を重ねながら、対象者の本音やニーズを少しずつ引き出したり、気付きを与える対話術です。また、国際協力の現場での調査・事業だけでなく、国内でのインタビューや身近な人々との対話にも役立つ技術です。

はじめに NPO 法人ムラのミライ（旧ソムニード）の活動紹介を交えながら、事業の持続性や住民の自立促進が上手くいかなかった時期の経験や本手法が開発された経緯をご説明いただきま

した。そして対話型ファシリテーションの要となる「事実質問」において、具体的にどのような疑問詞を使えばよいのかを教えてくださいました。この手法は「考えさせるな、思い出させる」をモットーに、「なぜ」、「どうですか」や解釈があいまいな言葉を避け、相手の回答に感覚や思い込みが含まれないようにすることがポイントです。簡単に聞こえるものの、ロールプレイやグループワークを通じて「これは何ですか」からスタートする事実質問の組み立て練習を行ってみると、つい抽象的な言葉を使ってしまいそうになり、難しいことを実感しました。他のグループの工夫された質問を聞いたり、発表後に質問の改善案などの意見を出し合い、学びの多い演習となりました。

さらに、現場で開発途上国の人々が「外国から来た援助関係者」である自分に気を遣ったり、援助側の北に応えることを考えながら回答してしまうことは当然であるため、真実を引き出すためには相手と対等な関係を築く努力が必要であるという点が印象に残りました。技術とインタビューの心得を身につけ、今後の国際開発の仕事に活かしていきたいと思います。

(グローバル協力センターホームページ報告)

4. 資 料

(1) 参加者アンケート集計結果

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

全学共通科目「国際共生社会論実習」の履修者には本イベントの参加が推奨されていたため、本イベントを知った経緯として、指導教員やその他（国際共生社会論実習の授業の一環として参加）、またポスター/チラシ等の掲示が多かった。

「内容全般」については回答者 21 人中 18 人が満足、3 人がやや満足と回答しており、満足度の高いイベントであったと言える。

「開催時期と期間」については 14 人が満足、5 人がやや満足、2 人が不満足との回答があり、不満足の理由として、奈良女子大学大学院の試験日にあたるため4年生は参加しづらい、また、内容に対して時間が長いとの意見があった。

「テーマの選択」については、19人が満足、2人がやや満足、「内容のわかり易さ」については、20人が満足、1人が不満足で、今回のテーマの関心の高さと内容について多くが満足している一方、不満足の理由としては「一つ一つの質問が具体的になりすぎて、質問の本来の主旨が見えづらくなる」との意見が寄せられた。参加者は、途上国で国際協力にかかる活動に携わった経験を持つ社会人（卒業生）、大学院生や、これからフィールド調査を予定している学生で、イベントを通じインタビューの手法を学ぶことを期待しての参加だったが、事実質問の練習を通じ、「質問によって、得られる答えが全く異なり、それが支援への成功・失敗を大きく分けることを実体験で教えてくださり、とてもおもしろかった。」「その人の経験を聞くということが新鮮だった。この質問の仕方がすぐにできるよう、日頃から練習していきたいと思った。」「一つ一つの事実質問をすることはとても大変だと思った。難しいと思った。しかし、これを行うことで発展途上国の人々の“本当の姿”を知ることができるという大切さや面白さを知ることができた。」「事実質問をすることで相手から本音を聞き出せるということを学び、初めて出会う人と会話をするときに使えると思った。また事実質問を自分にするすることで、自身の勉強やこれからの研究に活かせると思った。今回の学びを応用して、様々なことに活用したい。」などのコメントがあり多くの参加者が今後の活動に活かせると考えていると言える。

本イベントを何で知りましたか（複数回答）	計
ポスター／チラシ等の掲示	3
大学ホームページ、Facebook、Twitter、Ochamail	3
「共に生きる」スタディグループのメーリングリスト	2
教員の紹介	9
その他（大学の友人）	4

本イベントの感想（時期と期間）	計
満足／適当	14
やや満足／適当	5
やや不満足／不適当	2
不満足／不適当	0

本イベントの感想（会場）	計
満足／適当	20
やや満足／適当	1
やや不満足／不適当	0
不満足／不適当	0

本イベントの感想（テーマの選択）	計
満足／適当	19
やや満足／適当	2
やや不満足／不適当	0
不満足／不適当	0

本イベントの感想（内容のわかり易さ）	計
満足／適当	20
やや満足／適当	0
やや不満足／不適当	1
不満足／不適当	0

本イベントの感想（内容全般について）	計
満足／適当	18
やや満足／適当	3
やや不満足／不適当	0
不満足／不適当	0

その他（感想）
事実質問をすることで相手から本音を聞き出せるということを学び、初めて出会う人と会話をするときに使えと思った。また、事実質問を自分にすることで、自身の勉強やこれからの研究に活かせると思った。今回の学びを応用して、様々なことに活用したい。

事実質問が難しかった。英語でやると、そっちにも気を取られてもっと難しそうだった。Why, like 等、単語レベルで NG ワードを考えて、フィールドワークを使用と思った。気づかないうちに感情や考えを尋ねる質問をしていた。
事実質問を、スタディツアーという多数の聞き手がいる場で行う場合、今回の授業のように何個も質問を重ねていくことはできないと思うので、質問を厳選していくのは難しそうだなと思った。
一つ一つの事実質問をすることはとても大変だった。難しいと思った。しかし、これを行うことで発展途上国の人々の“本当の姿”を知ることができるという大切さや面白さを知ることができた。
本で読んで「なるほどー!」と思っていても、実際にワークショップでやってみると「テーマ」をきちんと意識しないと質問が論理的な流れにならず、難しいと感じた。
発展途上国での実際の支援の話を沢山聞けて、勉強になった。一見すると良い支援に聞こえるような支援も、うまくいかないこともあるのだと学んだ。事実質問について学んだだけではなく、実際に事実質問をどのように組み立てればよいのか知れたので、良かった。
途上国の人について考えるにあたり、“話し方”に着目して考えることはなかったので、新しい見方というか、新しい着目する点が得られて役立ったと思った。
事実質問について。質問内容によって全然違う答えが出てきていて面白いなと思った。スタディツアーに参加する時はこれを活かしたい。
相手に事実を話してもらえようにするには、相手を対等に肯定的な立場に、自分で合わせに行く。具体的には良いところ探しをするということ。
なぜか、どうして、どうだった? は正しいこと、知りたいことを聞き出せないこと。
発展途上国の人々に対して、具体的な質問をして「話したい」というスイッチを押すことが大切だということがよく分かった。

(2) 写真



講師の前川香子氏



ペアでの事実質問の練習



グループでの事実質問の練習



グループでの事実質問の発表

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

大学間連携イベント「ワークショップ：被災者の尊厳の視点から考える紛争・災害時の人道・緊急支援～スフィア・スタンダード、教育ミニマムスタンダードに学ぶ～」、『対話型ファシリテーション』を用いた途上国の人々との話し方」
実施報告書

2020 年 1 月

お茶の水女子大学グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel & Fax : 03-5978-5546

Email : inforwed@cc.ocha.ac.jp

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
ー女性の役割を見据えた知の国際連携ー

令和元（２０１９）年度 大学間連携イベント 実施報告書



お茶の水女子大学